

# 西安寺跡第7次

発掘調査報告書

2019. 3

王寺町教育委員会

# 西安寺跡第7次

発掘調査報告書

## 序

このたび、王寺町文化財調査報告書第14集を刊行することとなりました。

本書では、2017年度に文化庁の国庫補助事業として実施した西安寺跡第7次発掘調査の成果を報告しています。

西安寺跡は昭和初期から知られている古代寺院遺跡で、その創建は飛鳥時代に遡ると考えられています。これまでの発掘調査では塔跡と金堂跡と推定される建物跡を確認しており、本町にとって貴重な歴史遺産であることがわかってきています。

今回は、第3次調査で一部を確認いたしました塔跡について調査を行い、西安寺跡への理解を深め、これからの遺跡の保存、活用の計画を進めていこうと考えております。

最後になりましたが、調査の実施にご協力くださいました土地所有者様をはじめ、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課など、関係各所の皆様に御礼申し上げます。

2019年3月

王寺町教育委員会

教育長 中野 衛

## 例 言

1. 本書は、2017年度に国庫補助事業として実施した西安寺跡第7次発掘調査について報告したものである。  
西安寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会、2010年改訂版）10B-0001として掲載されている。

2. 調査は王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町教育委員会
教育長	梅野満雄（～2018.3） 中野衛（2018.4～）
教育次長	中井一喜
生涯学習課長	西本貴至（～2018.3） 藤本忠司（2018.4～）
文化財係長	岡島永昌（2017.7.～地域整備部地域交流課文化資源活用係長）
同主査	木下さおり（2017.7.～2018.3 地域整備部地域交流課文化資源活用係主査）
調査担当者	同臨時職員 櫻井恵（2017.7.～生涯学習課社会教育係臨時職員） 福井彩乃（2017.7.～生涯学習課社会教育係臨時職員）
遺物整理	青木佐和（2018.8～生涯学習課社会教育係臨時職員）
発掘作業	株式会社春山組
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、 青木勘時、江浦洋、大塚慎也、大村浩司、岡田雅彦、押木弘己、奥田尚、甲斐弓子、 近藤康司、清水昭博、下大迫幹洋、鈴木嘉吉、関川尚功、高橋香、嶽充紀、田中一廣、 田邊征夫、西垣遼、箱崎和久、平田政彦、平林章仁、丸山香代、光石鳴巳、森先一貴、 安村俊史、吉村公男（五十音順、敬称略） 西安寺跡史跡整備活用委員会（2017.2.17設置） 菅谷文則、大脇潔、山岸常人、東野治之、仲隆裕、岡林孝作（～2018.3）、 坂靖（2018.4～）、中川忠儀

3. 本書で使用している座標数値は世界測地系、水準値はT.P. 値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4. 土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に拠った。

5. 図2は国土地理院発行の1/50000地形図大阪東南部（昭和59年7月30日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010年改訂版）、図3・21は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）をもとに作成した。

6. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

7. 本書の執筆編集は櫻井恵が行った。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 調査の内容	5
第3章 まとめ	18

## 挿図表目次

図1 王寺町の位置	図10 VIII層出土遺物実測図1 (1/4)
第1章 はじめに	図11 VIII層出土遺物実測図2 (1/6)
図2 周辺の遺跡 (1/50000)	図12 VIII層出土遺物実測図3 (1/6)
表1 西安寺跡発掘調査一覧	図13 VIII層出土遺物実測図4 (1/6)
図3 調査位置図 (1/1500)	図14 VIII層出土遺物実測図5 (1/4)
第2章 調査の内容	図15 VII層出土遺物実測図 (1/4)
図4 基本土層模式図	図16 VI層出土遺物実測図 (1/4)
図5 A-A'・B-B'間土層断面図 (1/50)	図17 III・IV・V層出土遺物実測図 (1/4)
図6 検出遺構平面図・基壇外装立面図 (1/100)	第3章 まとめ
図7 基壇断面図・基壇外装石材石種 (1/50)	図18 塔基壇復元模式図
図8 基壇外周VIII層遺物出土状況平面図 (1/80)	表2 他塔との規模比較
図9 VI層堆積状況・ VII層上面検出遺構平面図 (1/100)	図19 塔の創建瓦
	図20 西安寺跡の古代遺構 (1/1000)

## 写真目次

写真図版1	写真図版5
調査地遠景 (東から)	基壇・基壇外周VIII層検出状況 (北東から)
遺構検出状況 (北東から)	基壇・基壇外周VIII層検出状況 (東から)
写真図版2	写真図版6
遺構検出状況 (測量用合成写真)	基壇外周VIII層遺物出土状況 (北から)
写真図版3	基壇・側柱礎石検出状況 (北西から)
調査前 (東から)	基壇・側柱礎石検出状況 (南西から)
調査前 (北から)	写真図版7
VI・VII層上面検出状況 (北東から)	礎石1 (西から)
写真図版4	礎石2 (西から)
VI層上面検出状況 (南から)	礎石3 (西から)
基壇東側VII層上面遺構検出状況 (南から)	写真図版8
基壇東側VII層上面遺構掘削状況 (南から)	乱石積基壇検出状況 (東から)
基壇北側VII層上面遺構検出状況 (北から)	乱石積基壇検出状況 (南東から)
	乱石積基壇検出状況 (北東から)

写真図版 9

石積にはさまる単弁蓮華文軒丸瓦（鏡を設置）

基壇外装裏込めに混じる凝灰岩の破片

基壇外周東面検出状況（北東から）

基壇外周北面検出状況（東から）

写真図版 10

基壇外周東面検出状況（東から）

A - A' 基壇外周北壁上層断面（南から）

B - B' 基壇外周西壁上層断面（東から）

写真図版 11 VIII層出土遺物 1

写真図版 12 VIII層出土遺物 2

写真図版 13 VIII層出土遺物 3

写真図版 14 VIII層出土遺物 4

写真図版 15 VI・VII・IV層出土遺物

写真図版 16 III・IV・V層出土遺物



図1 王寺町の位置

# 第1章 はじめに

## 1 位置と環境

**地理的環境** 西安寺跡が所在する王寺町は、奈良県の北西部に位置している。町の北端には奈良盆地を流れる河川の水を集める大和川が蛇行しながら西流している。この大和川が亀の瀬とよばれる峡谷をぬけ大阪平野へと流れ出ていく先には大阪府柏原市があり、亀の瀬が奈良県と大阪府の府県境となっている。王寺町の北側には大和川をはさんで三郷町、斑鳩町があり、東に河合町、東南に上牧町、南に香芝市が接している。

王寺町の地形は、河合町から延びる馬見丘陵の先端にあたる大阪層群からなる東部丘陵、大和川と町域を南から北へ流れる葛下川の沿岸に沖積層が堆積する東部低地、二上山火山群の北への延長である西部高地、東部低地と西部高地との漸移地帯で、大阪層群からなる西部丘陵にわけられる。西安寺跡は、王寺町の北東部に位置し、東部丘陵にあたる標高約80mの通称舟戸山の西麓、舟戸山から延びる谷筋がひろがる傾斜地に立地する。

西安寺跡は飛鳥時代に建立されたとされる寺院遺跡で、舟戸神社が西安寺の中心伽藍と考えられており、舟戸神社を中心として、東西約110m、南北約120mの範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地としている。現在、舟戸神社の東側は傾斜地を利用した田畑が広がり、隣接地には水田が営まれている。西側は畑地、住宅が広がるが、昭和40年代に住宅開発されるまでは水田であった。南側には、小学校が設置されているが、標高67.5mの丘陵を造成し建設されたもので、山裾が西安寺跡の間近に迫っていた。神社鳥居から北へ60mには舟戸新池があり、北方約250mには大和川が流れている。この舟戸新池については、天理大学附属天理図書館に所蔵される元文3年(1738)「御尋ニ付申上覚書」により、享保7年(1722)に築造にされ、当時は、字名から「西安寺池」と呼称されていたことがわかる。現在、舟戸神社の境内は周囲の田畑に比べると1～2m程度高く、最高所で標高は約45.5mあり、人為的に造成された土地との印象を受ける。

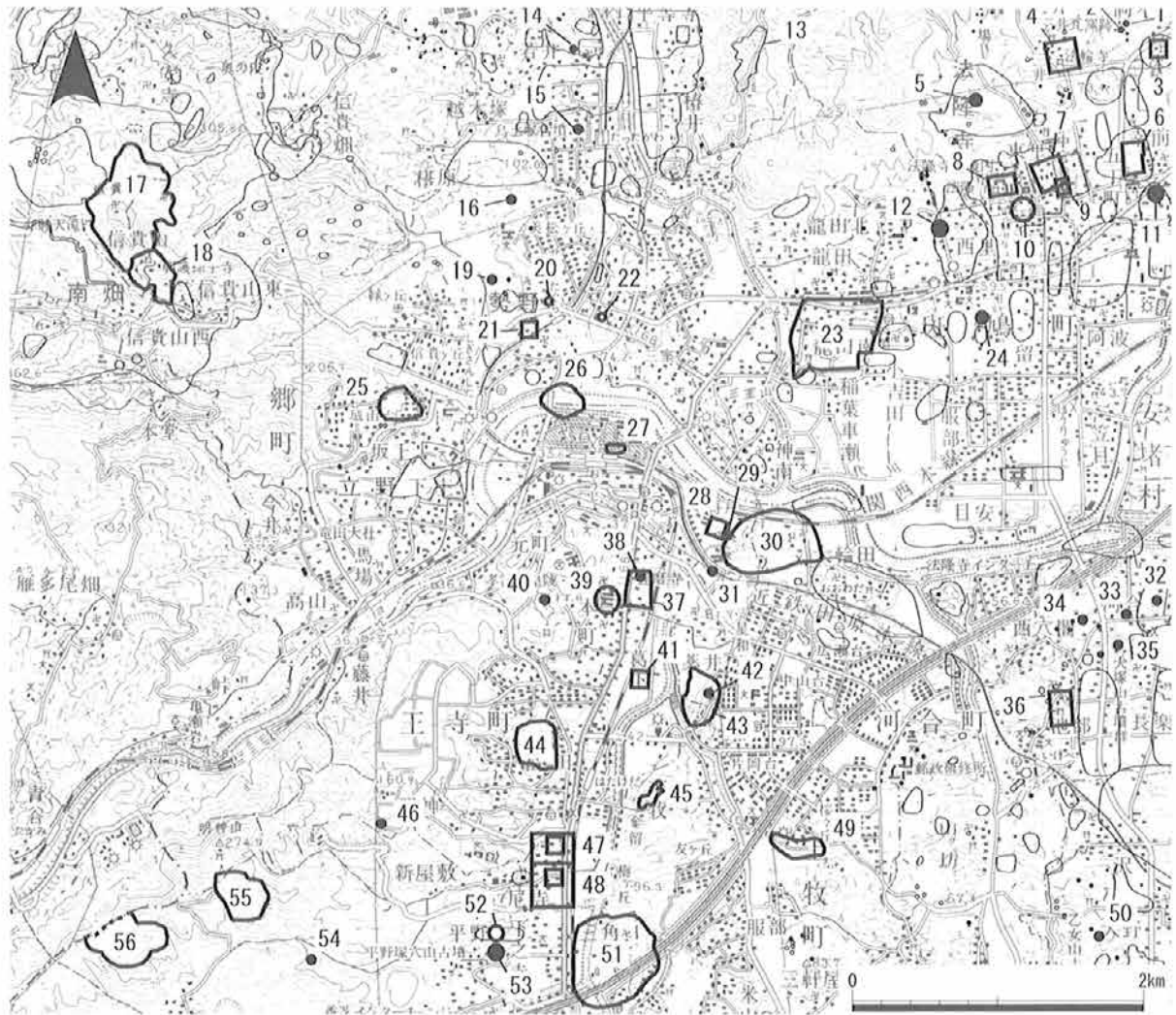
**歴史的環境** 西安寺跡(28)の周辺で注目する遺跡としては、舟戸・西岡遺跡(30)があげられる。舟戸山の標高70m以上が遺物散布地となっており、これまでに弥生時代後期の住居址と古代の掘立柱建物が検出されている。山の北端は大和川に面して急斜面を形成しており、大和川を眼下に望む位置に営まれた遺跡である。西安寺跡の東方には、西安寺に所用された瓦を焼いたといわれる西安寺瓦窯(29)がある。西安寺跡のある谷筋の北側にあたり、すでに住宅地となっているため、瓦窯の遺構は確認することはできず、詳細は不明である。窯跡の南には「瓦谷池」(かわんだいけ)があり、池の護岸工事を行った際には、瓦の出土をみたとの話が残っており、窯跡周辺で実施した工事立会でも瓦の出土を確認している。

西安寺が創建されたと考えられる飛鳥時代には、大和川、葛下川の流域において古代寺院が多く造営される。法隆寺若草伽藍(10)は7世紀初頭、中宮寺跡(6)・平隆寺跡(21)・片岡王寺跡(39)は7世紀前半、法起寺(3)・法輪寺(4)・法隆寺西院伽藍(8)・長林寺跡(36)・尼寺北廂寺(47)・尼寺南廂寺(48)は7世紀半ばから後半の創建とされている。これらの寺院が建立されたのは、推古天皇9年(601)聖徳太子の斑鳩宮の造営が行われたことによる。大和川は古来より、奈良盆地と河内平野を結ぶ経路であり、聖徳太子が朝鮮半島からもたらされる先進文化の受け入れ口としてこの地域をおさえることを重要視したのであろう。斑鳩文化圏からつながる道に沿ってこの周辺の古代寺院が建立されたと考えられる。

西安寺跡の西方には、斑鳩と当麻方面を結ぶ街道が通っている。中近世には、当麻道とよばれる法隆寺から達磨寺を通り当麻寺へと至る道である。この道は、推古天皇30年(622)に斑鳩で亡くなった聖徳太子の御遺体を大阪府太子町にある磯長墓まで運んだ道とも重ねて、「聖徳太子葬送の道」として聖徳太子信仰の一つとなっている。

西安寺跡の中心伽藍のある舟戸神社は舟戸地区の氏神として地元の人々の信仰を集めている。神社の創立に





- 1 瓦塚1号墳 2 三井瓦窯跡 3 法起寺境内 4 法輪寺境内 5 仏塚古墳 6 中宮寺跡 7 斑鳩宮跡 8 法隆寺西院伽藍  
 9 法隆寺東院伽藍 10 法隆寺若草伽藍 11 駒塚古墳 12 藤ノ木古墳 13 椿井城跡 14 西宮古墳 15 鳥土塚古墳  
 16 今池瓦窯 17 信貴山城跡 18 信貴山朝護孫子寺 19 辻ノ垣内瓦窯跡 20 上ノ御所瓦窯 21 平隆寺跡 22 勢野茶臼山古墳  
 23 龍田城跡 24 斑鳩大塚古墳 25 立野城跡 26 久度遺跡 27 久度南遺跡 28 西安寺跡 29 西安寺瓦窯  
 30 舟戸・西岡遺跡 31 岩才池北古墳 32 城山古墳 33 丸山古墳 34 高山塚1号墳 35 川合大塚山古墳 36 長林寺跡  
 37 達磨寺田境内 38 達磨寺古墳群 39 片岡王寺跡 40 馬ヶ谷城跡 41 寺院推定地 42 葉井瀧ノ北遺跡 43 香滝・葉井遺跡  
 44 畠田城跡 45 片岡城跡 46 畠田古墳 47 尼寺北廃寺 48 尼寺南廃寺 49 下牧瓦窯跡 50 池上古墳 51 木辻城跡  
 52 平野窯跡群 53 平野古墳群 54 今泉古墳 55 送迎山城跡 56 七郷山城跡

図2 周辺の遺跡 (1/50000)

については不詳であるが、境内にある手水鉢には、嘉永元年(1848)、灯籠には嘉永3年(1850)の銘があることから、江戸時代後期の信仰を向うことができる。祭神は天兒屋根命と久那戸大神である。久那戸神は岐神、道祖神、賽の神と同じく道路や旅人などを守る神である。舟戸地区は、近世の王寺村の集落の一つで「船渡組」と表記されることがあり、当麻街道において大和川を渡る「渡し船」との関連が示される。交通の要衝にあったこの地を守護するために勧請されたのであろう。



## 2 調査の契機と経過

**研究の萌芽期** 舟戸神社の境内が西安寺跡にあたることは、昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏の報告によって周知のものとなった。保井氏は、『大和上代寺院志』の中で文献にみられる西安寺（一名、久度寺）の地が、「西安寺」の字名が残る舟戸神社の境内を主要建造物の位置と考え、西安寺跡で採集した飛鳥時代から鎌倉時代の軒丸瓦・軒平瓦等を報告している。石田氏は、『飛鳥時代寺院址の研究』の中で、塔心礎と思われる径1間以上の礎石面の中央に径2尺余の円形穴を穿ったものが狛犬の東方3間位にあったことを地元の好事家である正光寺住職から聞き取り、拝殿の北東を塔の位置と考えた。また、拝殿の南側で礎石が破碎、散乱している所を金堂跡と推定し、拝殿の西北に東西方向に延びる帯状の高まりにも注目している。そして、舟戸神社周辺の地形と舟戸神社の西方約30mの田に「門脇」「馬場脇」の俗称が残っていることから、西面する法隆寺式伽藍配置の寺院であろうと西安寺跡の伽藍を復元している。

**関係史料** 西安寺の創建を示す史料は残されていない。その寺名が初めて文献に現れるのは、『続日本後紀』の天長10年(833)条であり、そこには西安寺が「大和国広瀨(瀬)郡にあり、俗号久度」と記されている。時代は下って、仁安3年(1168)、弘安4年(1281)にも関係史料があり、貞和3年(1347)の史料では、西安寺が興福寺一乗院の庄園であったことが伺える。そして、永正10年(1513)に「西安寺北之坊興秀」の名が見えるのが最後になる。しかし、この史料に記される西安寺が地名であるのか、寺名であるのか判断することは難しい。

西安寺の南西約900mには、7世紀前半の創建とされる片岡王寺跡(放光寺)があり、この放光寺については、正安4年(1302)に権僧都審盛が著し、嘉吉3年(1443)に実誉が筆写した『放光寺古今縁起』2巻が残されている。放光寺の由緒、沿革を記し、荒廃した放光寺の再興のために撰述されたものである。その中の「夕梵晨鐘殿二字」の項に「西安寺」の名をみることができる。そこには、康平3年(1060)興福寺焼失の時に奪われた鐘を補填するために西安寺から鐘を押し取ったことが記される。また、西安寺は片岡王寺とともに聖徳太子建立の46箇院のひとつにあげられている。これは、訓海によって著された『太子伝玉林抄』に引かれる「私注抄」の記述によるものである。

**創建氏族** 西安寺の創建者については、『新訂王寺町史』本文編(2000年)に平林章仁氏による見解が示されている。仁安3年(1168)の「大和国大原吉宗田地売券」には、「広瀬郡久土十条寺岡一里卅五坪西安寺」にある田地は大原吉宗の先祖が相伝してきた地と記されている。「広瀬郡久土十条寺岡一里」は現在の舟戸神社の鎮座するところである。また、王寺町久度には西安寺の別名と同一の久度神社(延喜式内社)があり、祭神のひとつである久度神は、かまどの後方の煙だし部分を神格化したカマド神で渡来系氏族が奉斎するものである。久度一帯には渡来系氏族が居住していたとみられることから、渡来系氏族である大原史氏を西安寺の創建者としている。

**既往の発掘調査** 昭和初期に報告がなされて以降、西安寺跡に発掘調査の手がはいることにはなかった。現在、6次の発掘調査が行われている。第1次調査は、昭和59年(1984)度に橿原考古学研究所が集合住宅の建設に伴って実施したものである。調査区の西端で検出された南北方向の溝は、西安寺の西側の築地の溝と考えられている。それ以降の調査は王寺町教育委員会が実施している。西安寺跡の調査で画期となるのは、平成26年(2014)度の第3次調査である。石田氏が塔跡と推定した位置で調査を行い、礎石2基、心礎の抜取穴、四天柱の礎石4基の抜取穴と乱石積基壇を検出、塔跡を確認した。翌年には、塔跡の北側で金堂跡と推定できる建物基壇を検出し、舟戸神社境内に西安寺の中心伽藍があることが確実になった。それぞれの調査については表にまとめる。

表1 西安寺跡発掘調査一覧

調査年度	調査回数	調査機関	調査原因	主な遺構	主な遺物	報告書
昭和 59 (1984)	1次	奈良県立 橿原考古学研究所	集合住宅	西安寺西側の築地のものか と考えられる溝	単弁蓮華文軒丸瓦・重弧文 軒平瓦・土師器皿	1
平成 23 (2011)	工事立会	王寺町教育委員会	擁壁工事	—	飛鳥～室町時代の瓦	—
平成 26 (2014)	2次	王寺町教育委員会	宅地造成	—	—	—
平成 26 (2014)	3次	王寺町教育委員会	範囲確認	塔基壇、礎石、 心礎抜取穴、礎石抜取穴	飛鳥～室町時代の瓦、 焼けた壁土	2
平成 27 (2015)	4次	王寺町教育委員会	範囲確認	建物基壇、礎石、 礎石抜取穴	飛鳥～室町時代の瓦	3
平成 28 (2016)	5次	王寺町教育委員会	個人住宅	掘立柱柱穴、自然流路、溝	土師器・須恵器・瓦器	4
平成 28 (2016)	6次	王寺町教育委員会	範囲確認	古代の溝	飛鳥～室町時代の瓦	4

- 報告書 1. 奈良県立橿原考古学研究所 1985 『西安寺跡』『奈良県遺跡調査概報 1984年度』  
 2. 王寺町教育委員会 2016 『西安寺跡第3次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書 第11集  
 3. 王寺町教育委員会 2017 『西安寺跡第4次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書 第12集  
 4. 王寺町教育委員会 2018 『西安寺跡第5・6次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書 第13集

**第7次発掘調査** これまでの調査成果から、舟戸神社境内とその周辺には、西安寺跡の遺構が良好な状態で残っていることが明らかとなってきた。王寺町では、平成28年度に西安寺跡史跡整備活用委員会を組織し、西安寺跡を貴重な文化財として保存・活用していくために発掘調査を年次的に実施していくこととなった。

初年度となる第7次調査は、第3次調査で確認した塔跡について、塔跡の基壇規模、創建年代を明確にすることを調査の目的とした。これまでの調査から塔基壇の東部分が遺構の残りがよいことが予想されるので、第3次調査で確認している2基の礎石を含む東面側柱列、東面の基壇外装、基壇北東隅が検出できるよう、第3次調査の東半分と神社の東に隣接する水田に調査区を設定した。

調査は、第3次調査の東半分を再掘削し、中央間にあたる側柱の礎石2基、基壇、東辺の基壇端の石列を検出。そこを中心として掘削範囲を拡げていくこととした。まず、側柱南東角の礎石を確認するために東西幅3m、南へ2mの調査区を拡張し、礎石があると予想される位置に礎石抜取穴とみられる攪乱を検出した。次に第3次調査の調査区を東に2.3m拡張し、基壇外装及び、東側水田部分の遺構の残存状態を確認した。その後、2m幅で側柱のとおりを北側へ掘り進み、北東角の礎石、基壇北端で東西方向に延びる石積を確認した。これに合わせて、西安寺跡史跡整備活用委員会を開催し、調査の方針、遺構の検討を行った。この後、基壇北東角、東面の基壇外装を検出するために掘削を継続させた。調査面積は約70㎡である。

平成29年12月6日にラジコンヘリによる航空写真撮影を行い、翌7日に調査成果を報道発表し、9日に現地説明会を開催。約500名の参加が得られた。12日には写真測量を実施している。

調査期間は平成29年11月6日から12月26日まで、実働39日である。

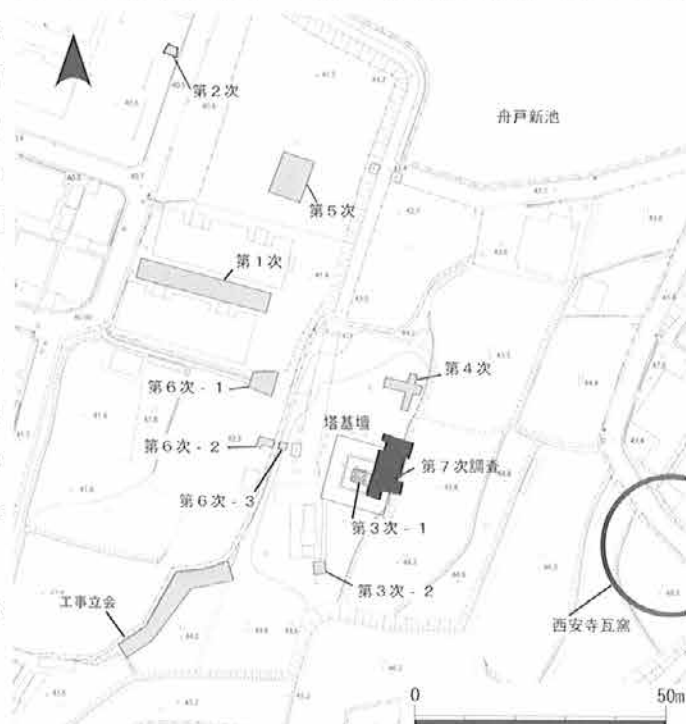


図3 調査位置図 (1/1500)

## 第2章 調査の内容

### 1 層 序

調査区内の神社境内と水田部分では、堆積状況が異なるので、神社境内の堆積を基本土層として報告する。

I層 腐葉土。現在の表土である。

II層 境内東端の斜面に堆積。ビニール等が含まれており、現代の堆積層である。

III層 境内東端の斜面に堆積。近現代の磁器が出土しており、近現代の堆積層である。

IV層 境内の東半の社叢全体に堆積する厚さ約65cmの盛土。瓦、焼けた壁土、須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、古寛永通宝が出土している。この層の上面から、礎石の抜取りが行われている。近世～近代の造成の可能性が高い。

V層 基壇外周に堆積する細粒砂混じりシルトを主とした層。基壇北側では、約40～70cmの厚さがある。V層の堆積過程でVI層が流れ込んだとみられ、炭の混入した薄層をはさみながら堆積している。基壇東側では、焼土がまとまって混入する箇所がある。この層からは、東播系須恵器甕、土師器、瓦器、瓦質土器が出土しており、中世以降の堆積層である。

VI層 厚さ10cm前後で基壇上に堆積する。側柱礎石列付近が最も厚く堆積し、基壇端では基壇外周に流れる部分もある。火災による塵灰層で火災後はそのまま放置されていたようである。この層からは、瓦、須恵器、土師器、瓦器、焼けた壁土、鉄釘、銅製品が出土している。

VII層 基壇外周の堆積層。基壇外装の基底部分から30～50cmの厚さで堆積する。基壇北側では、水成堆積の砂層をはさみながら堆積する状況が認められ、洪水等による堆積層である。瓦、須恵器、土師器、瓦器が出土しており、この層の上面で遺構を検出している。

VIII層 基壇外周の堆積層。基壇外装の基底部分から外側へ10～20cmの位置から堆積する層である。基壇から遠ざかるほど堆積は厚くなり、調査区の北端では約30cmの厚さがある。瓦、埴、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、瓦器、凝灰岩、鉄釘が出土している。

IX層 基壇・基壇裏込め。基壇の断ち割り調査は実施していないので、基壇内部の構造については不明である。裏込め土の中には凝灰岩の小片が含まれる。

X層 地山。基壇基底部分周縁と基壇下に堆積する。乾裂痕がみられ、塔基壇造成時の地表面。

XI層 地山。西安寺跡一帯に広がるシルト～粘土層。

調査区の東端は現在も水田として利用されており、境内地のへりに添って用水溝の掘り直しが何度も行われている。また、VII層の東側には粘土層が堆積し、VII層の堆積後に基壇の東側は水田として利用されており、当時は現在よりも耕作が基壇近くに及んでいたとみられる。

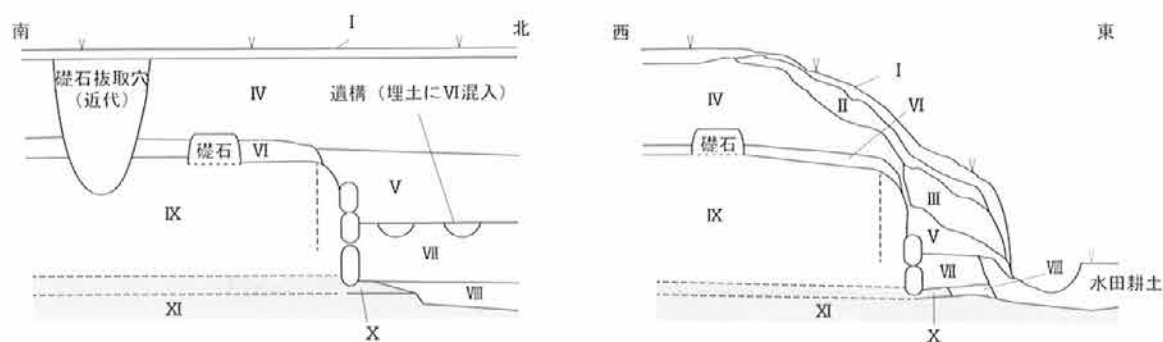


図4 基本土層模式図



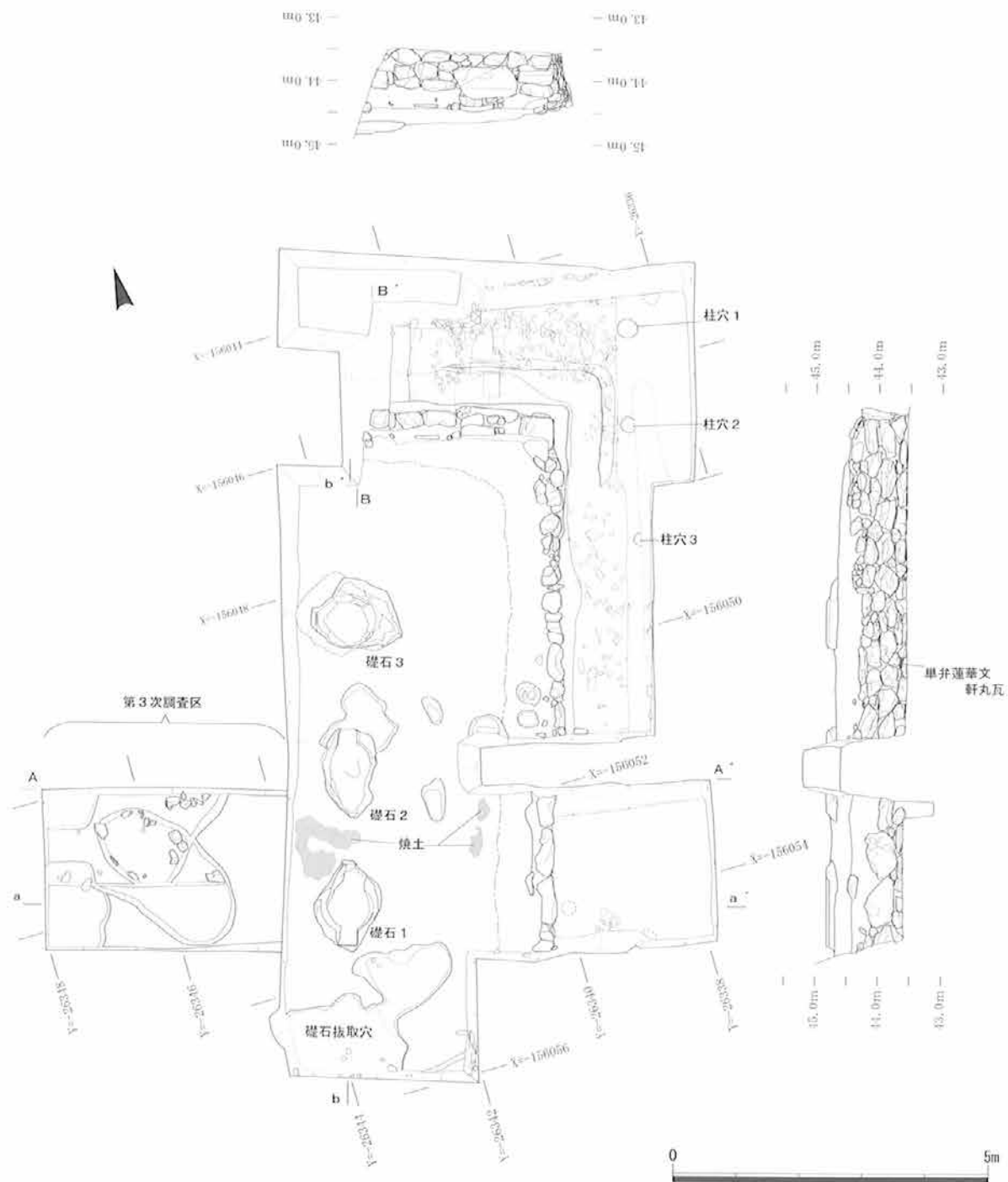


図6 検出遺構平面図・基壇外装立面図 (1/100)

## 2 検出遺構

**礎石** 塔の東面の側柱にあたる礎石3基を検出した。礎石1、2は、第3次発掘調査で検出したものである。検出した礎石はいずれも被熱により表面が赤く変色し、剥離している。礎石から剥離したと思われる石材が基壇上に広く堆積するVI層から出土している。部分的に残る柱座の輪郭などから柱座径を復元した。以下の数値は、今回の調査の計測値である。

礎石1は南北長146.0cm、東西長106.0cm、礎石中央に径71.0cm(推定)、高さ5.0cmの柱座があり、南北両側に地覆座が認められる。北側の地覆座は明瞭な造り出しがなく、先端に向かって狭くなり、端では幅約20cmの地覆石をのせるための斜り込みがある。南側は幅29.0cm、長さ25.0cmの方形の地覆座を造り出し、先端

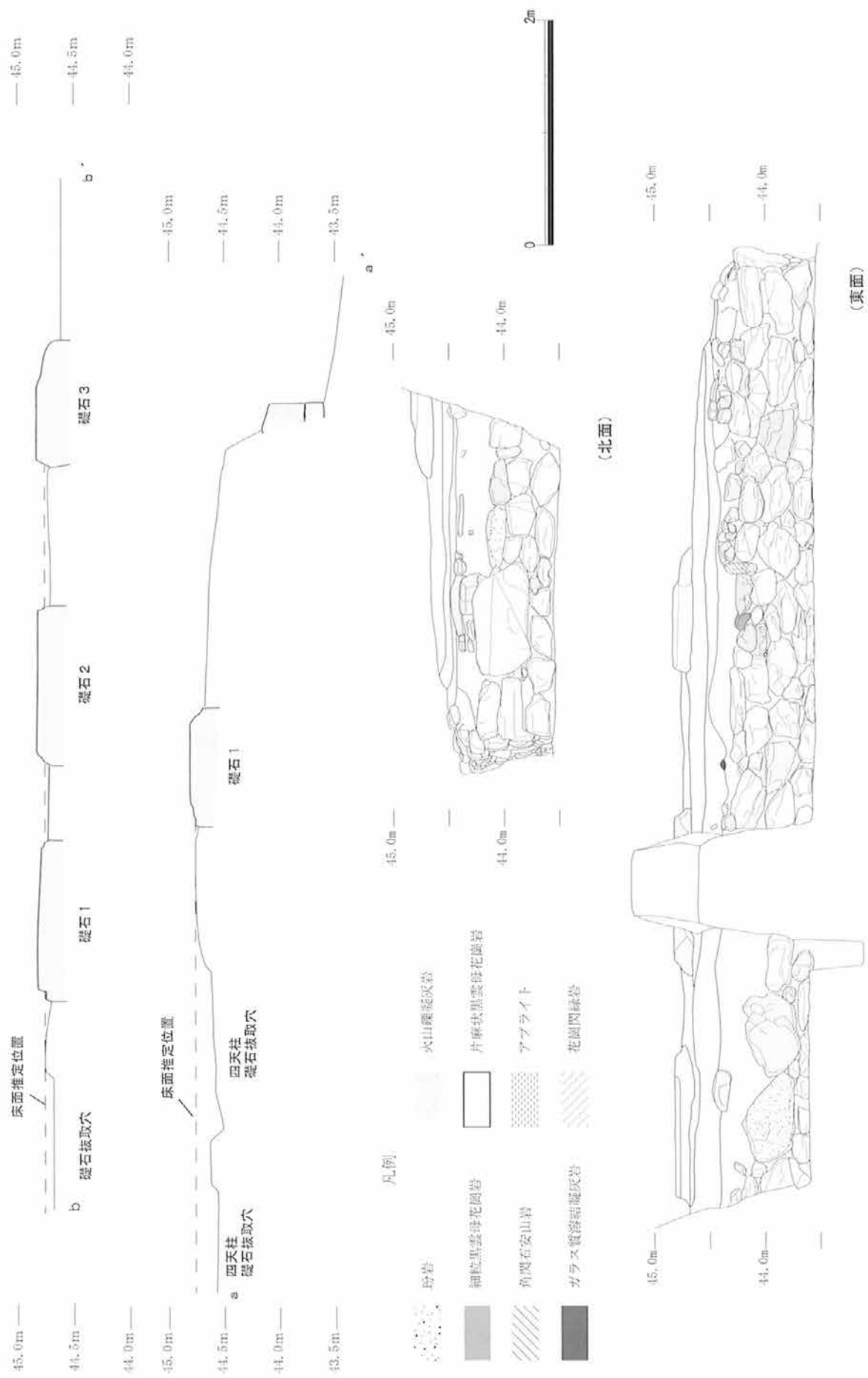


図7 基壇断面図・基壇外装石材石種 (1/50)



は北側と同様に刳り込みの加工がある。石材は片麻状黒雲母花崗岩である。

礎石2は南北長140.5 cm、東西長87.0 cm、礎石1と同様に欠ける部分が多いが、柱座の北東部の円弧が残存していることから、径71.0 cm（推定）、高さ5.0 cmの柱座である。北側に幅29.0 cm、長さ23.0 cmの地覆座が造り出されている。南側には明瞭な地覆座の加工はないが、端部に地覆石をのせる刳り込みが認められる。石材は花崗閃緑岩である。

礎石3は南北長111.0 cm、東西長142.5 cm、礎石の西寄りに径72.0 cm（推定）、高さ7.0 cmの柱座をもつ。南側には地覆座はないが、西側の端部に幅21.0 cmの地覆石をのせる刳り込みが認められ、塔の北東角の礎石にあたる。石材は片麻状黒雲母花崗岩である。

礎石上面の標高は礎石1が44.82 m、礎石2が44.82 m、礎石3が44.83 mである。3基の礎石の推定柱座の中心間の距離はそれぞれ2.25 mを測る。

**礎石採取穴** 調査区の南西角で南北長1.25 m以上、東西長1.9 m以上で広がる不整形の上坑を検出した。第3次調査で検出した四天柱の採取穴と同じく、境内に堆積する盛土であるIV層上面から掘り込まれている。側柱の礎石1～3と並ぶことから、南東角の礎石の採取穴とみられ、土坑の中心と礎石1の距離は2.25 m前後である。

**基壇** 礎石付近の最も残りの良いところで標高44.73 m～44.74 mで検出した。基壇の高さは約1.2 mである。礎石の柱座の中心点から基壇端までの距離は礎石1から東へ3.27 m、礎石3から北へ3.31 mとほぼ同距離である。

基壇面では、礎石以外は床面の構築物は認められない。礎石の周りには掘り込みがあり、基壇の縁辺は削平され、基壇端に向かって検出面が傾斜している。そのため、基壇外装の内側、50～60 cm幅で裏込めが確認ができ、裏込めの上には凝灰岩の小片が混じる。基壇の表面は、直上のVI層の堆積の原因となる火災によって、全体的に赤く変色している。第3次調査では、焼土が床面に張り付く状況を検出したが、新たに調査した区域では、そのような状況は認められなかった。

基壇築成に関しては、今回断ち割り調査を行っていないので版築の有無は不明である。基壇東側の土層断面により、基壇下に地山のX、XI層が堆積することを確認しており、掘り込み地業は行われていない。

**基壇外装** 基壇の東面8.3 m、北面2.8 mの約11.1 m分の乱石積基壇外装を検出した。乱石積には、一辺15 cm程度の小さなものから、横97 cm×縦50 cmの大きい石材が使用されており、2～5段、約75 cmの高さまで残存している。基壇北面、基壇東面北寄りと第3次調査区の石積の上端では、凝灰岩が設置されている箇所が認められる。石積の一段目は長辺が30～40 cmの大きさを揃えた石をX層に据えている。また、石積の間に古代の瓦がはさまれることを複数箇所を確認している。特に東面の一段目と二段目の間には、単弁16弁蓮華文軒丸瓦がはさまみ込まれている。残存する石積の上部は土圧によるものか、前方に傾斜している。

基壇外装に使用された石材の石種同定については、奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員奥田尚氏に依頼した。石材は片麻状黒雲母花崗岩が多くを占め、花崗閃緑岩、アブライト、玢岩が少量、角閃石安山岩、細粒黒雲母花崗岩が1点ずつ使用されている。片麻状黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、アブライト、玢岩は、西安寺跡の東方の丘陵の露岩を採取したものである。また、乱石積上部に設置される火山礫凝灰岩は、鹿谷寺跡北方付近のものである。

基壇東面の中央間にあたる礎石1、2間の位置に階段施設の痕跡は確認できなかった。

**基壇外周** 基壇北東角付近の残りがよい。基壇裾から外側へ約16 cmの位置からなだらかに傾斜し、約75 cmの位置で傾斜角度が変化している。X・XI層が基壇外周の検出面であり、基壇裾から外側の傾斜角度が変化するまでの約75 cmが犬走りと考えられる。雨落溝の工作物の遺構、痕跡は認められなかった。

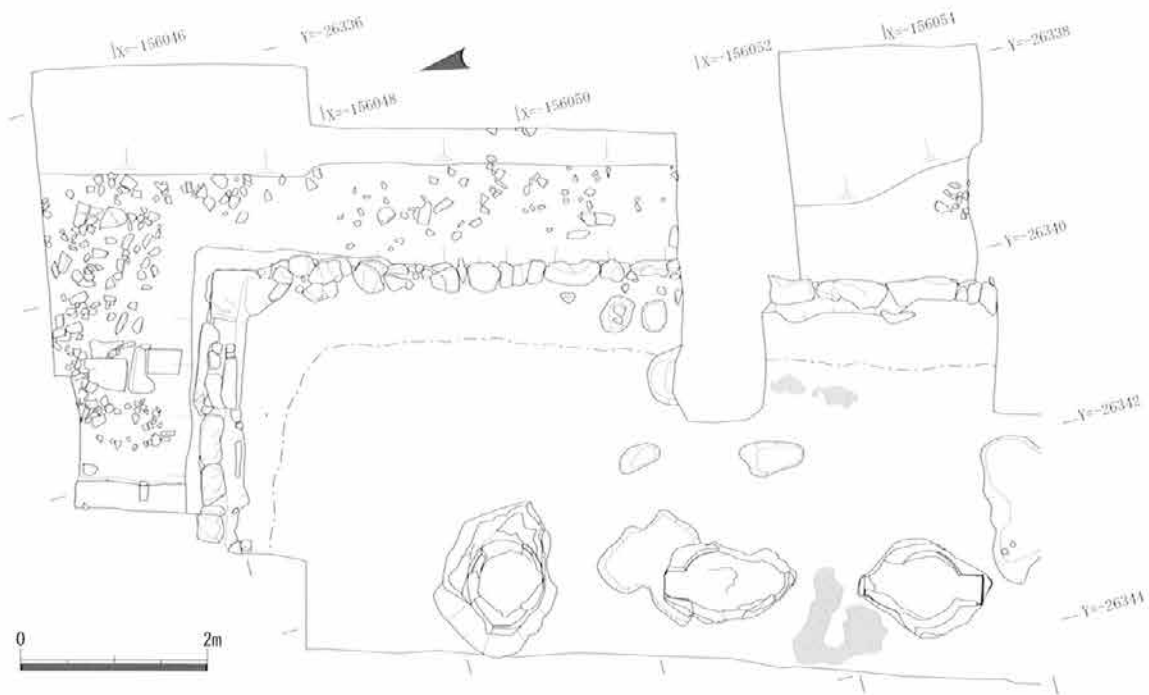


図8 基壇外周Ⅷ層遺物出土状況平面図 (1/80)

基壇外周には、Ⅷ層が堆積している。Ⅷ層の堆積は、地山の傾斜によって基壇から離れるほど厚くなり、調査区北端では30cmを測る。

基壇外周の形状から、基壇の造成にあたっては、基壇を中心としてⅩ・Ⅺ層の地山を土壇状に成形したものと考えられる。土壇の傾斜を雨落と兼ねたため、雨落溝の工作物も設置もされなかったのではないだろうか。

**足場穴** 基壇外周のⅧ層を除去した後に3基の柱穴を検出した。柱穴1は直径30.0cm、埋土は5YR4/6赤褐色粗粒砂混じり粘土、柱穴2は直径25.0cm、埋土は10YR3/4暗褐色微粒砂混じりシルト、柱穴3は直径20.0cm(推定)、埋土は10YR4/2灰黄褐色シルトである。柱穴1は礎石と基壇北東角の延長線上にあり、柱穴2、3は軒先の外側にあり、柱穴1ともほぼ直線上に並ぶため、足場穴と考えられる。掘削は行っていない。

**Ⅶ層上面遺構** 基壇の東側で4基、基壇北側で1基の土坑を検出した。SK01は南北50.0cm、東西60.0cm、深さ9.5cmの不整形の土坑である。埋土は10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトと10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂混じり粘土の2層が堆積する。SK02は南北80.0cm、

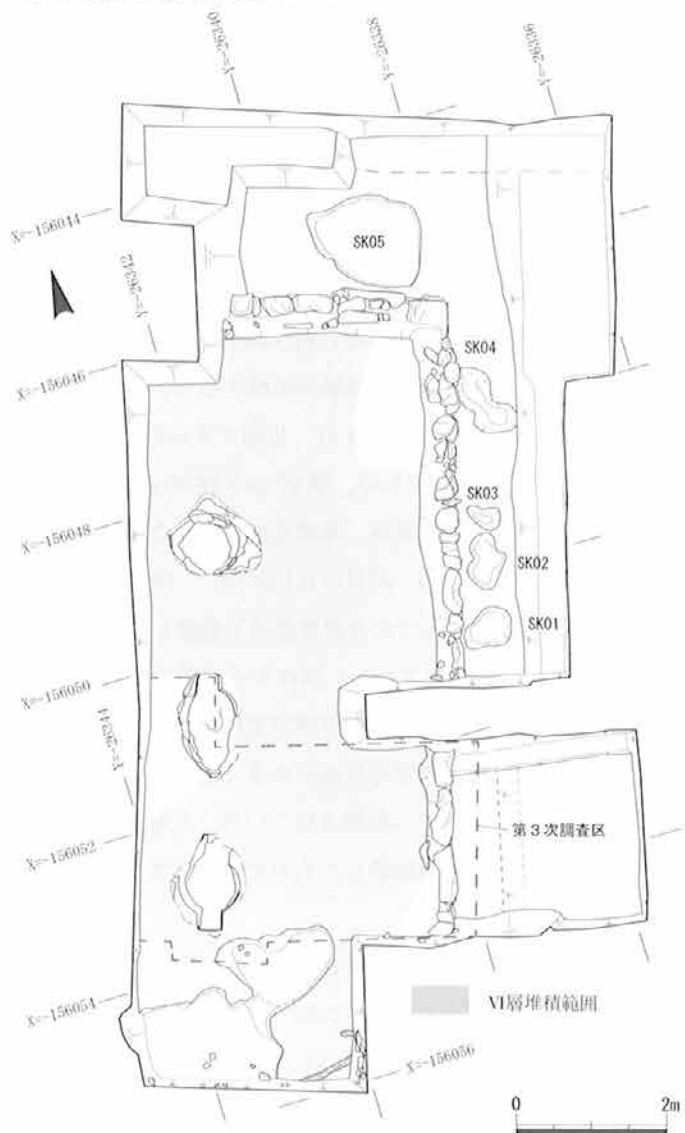


図9 Ⅵ層堆積状況・Ⅶ層上面検出遺構平面図 (1/100)

東西 45.0 cm、深さ 9.9 cm の不整形の土坑である。埋土は 10YR3/4 暗褐色微粒砂混じりシルト、10YR4/3 に近い黄褐色細粒砂混じり粘土である。SK03 は南北 30.0 cm、東西 50.0 cm、深さ 6.1 cm、楕円形を呈する。埋土は 10YR3/4 暗褐色微粒砂混じりシルト。SK04 は長軸 1.1 m、短軸 50.0 cm、深さ 11.9 cm、平面は瓢箪の形状をしている。埋土は 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂混じり粘土。SK05 は南北 1.0 m、東西 1.5 m、深さ 8.2 cm で楕円形である。SK01 ~ SK05 はいずれも埋土に炭が混入しており、基壇上の火災前の遺構である。

**VI層** 基壇上の火災の痕跡で、主として炭からなる。礎石の周囲及び、第3次調査区が最も厚く、第3次調査区内では焼土塊が基壇面に残存していた。このVI層の堆積は、基壇北東部では薄くなり、北東角では堆積していない。VII層上面の遺構やV層への流れ込み、近世から近代の盛土であるIV層との間に堆積する層がないことから、このVI層は長い期間地表にあったと考えられる。

### 3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ 400 箱である。その大部分は I ~ IV層から出土した瓦で、これらは未洗浄である。塔基壇についての情報を得るために、基壇外周に堆積するVII層とVIII層、塔基壇を覆うVI層の遺物から整理作業を行った。これら3層からの出土遺物、調査中に抽出しておいたIII ~ V層出土の遺物について報告する。

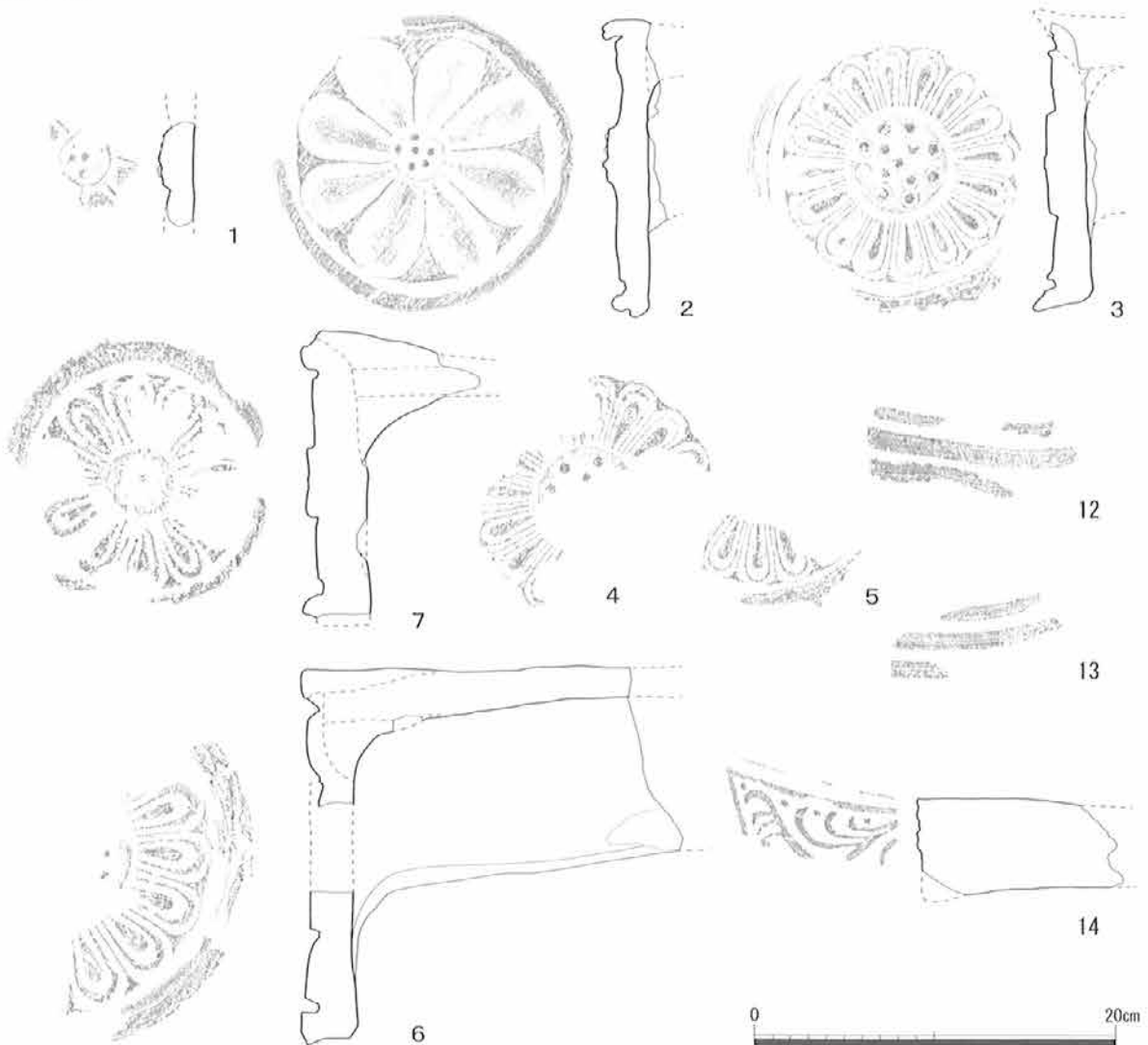


図 10 VIII層出土遺物実測図 1 (1/4)

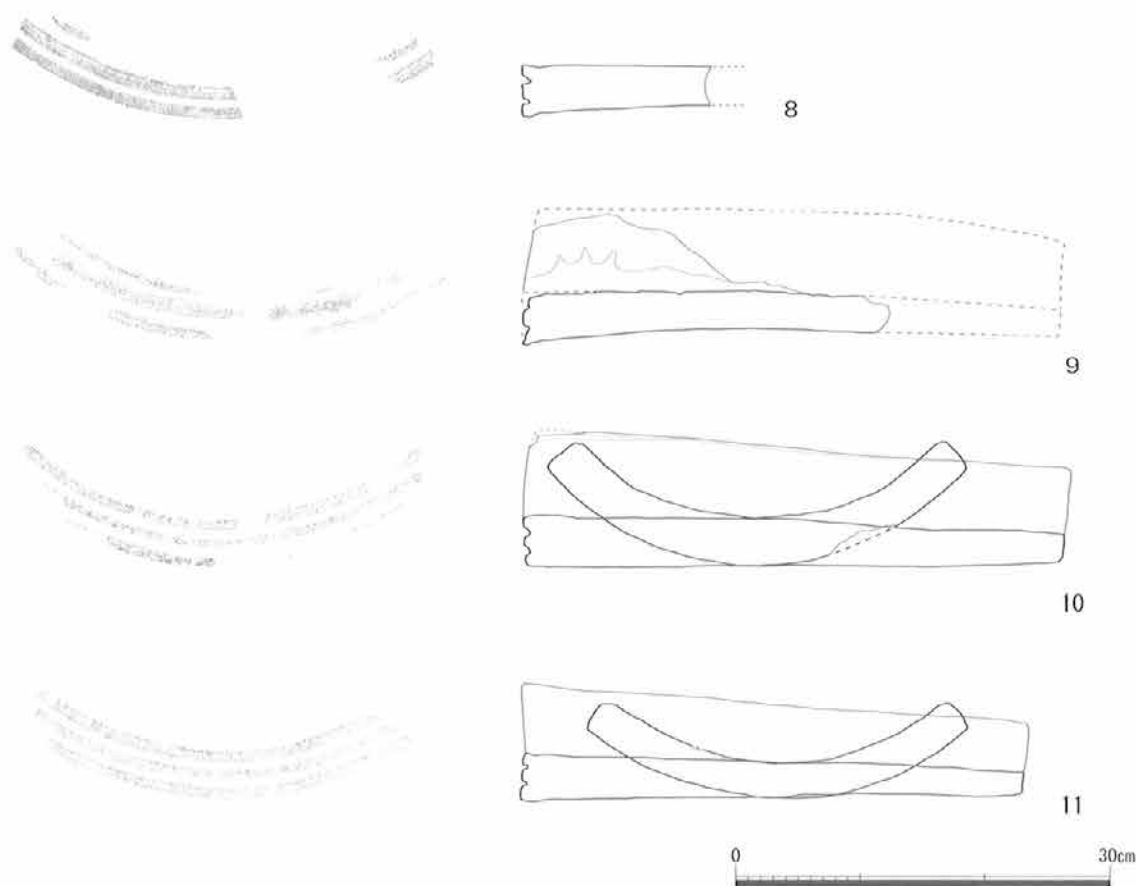


図11 VIII層出土遺物実測図2 (1/6)

(1) VIII層

**軒丸瓦** 1は中房と蓮弁の中心部のみが残存する素弁蓮華文軒丸瓦である。中房の径3.4cm、蓮子は1+5であろう。瓦当厚は1.8cmで、色調は5PB4/1暗青灰色。焼成は硬質である。2の素弁8弁蓮華文軒丸瓦は瓦当面が歪んでおり、長径17.7cm、短径16.5cmを測る。中房は径2.3cmで1+5の蓮子があり、蓮子の位置は中房の中心から外れている。瓦当厚2.3cmである。瓦当面には、瓦範の本目の転写、範傷が認められる。色調はN6/0灰色。胎土は、1mm以下の砂粒を含む密なもので、焼成は硬質である。3～5は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。3は瓦当径16.6cm(復元)、厚さ2.1cm、中房径5.5cm、1+4+8の蓮子。蓮子には周環があり、外縁は斜縁・無文である。色調はN7/0灰白色、焼成は良好である。6は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で瓦当径20.6cm(復元)、厚さ2.5cm。中房が大きく蓮子が1+8+16のものであろう。蓮子に周環がある。接合には丸瓦の上部を削り片柄とし、丸瓦の凹面に斜格子のキザミを施し、瓦当外縁、接合部の内外面に粘土を付加している。色調はN5/0灰色、焼成は硬質である。7は単弁11弁蓮華文軒丸瓦で瓦当径16.2cm、厚さ3.3cm、中房径3.8cm。蓮子は1+(6)、外縁は無文である。瓦当への丸瓦の接合位置が、瓦当上端から下がった位置にあり、凸凹両面に厚く粘土を付加している。表面はすべて磨滅しており、調整は不明。色調は5YR6/8橙色である。

**軒平瓦** 8～13は三重弧文軒平瓦で頸の形態は直線頸である。8の弧線幅は上から0.8cm、1.2cm、0.9cmと中段が幅広である。凹面は、糸切り痕、布目痕があり、なでによって消えている箇所がある。瓦当面に沿って幅1.9cmの強めのなでが施されている。凸面は、全体的になで調整で、瓦当側には横方向のなでと瓦当に沿って約0.7cm幅の面取り状の擦痕があり、弧線施工工具の痕跡とみられる。色調はN7/0灰白色、焼成は硬質である。9は瓦当幅が37.5cm(復元)、長さ43.5cm、瓦当面の厚さ4.1cmである。器面の磨滅が激しく、凹面には摸骨痕、糸切り痕、布目痕が凸面にはなで調整の痕跡がかろうじてみてとれる。8と同様に凹面瓦当に沿って幅

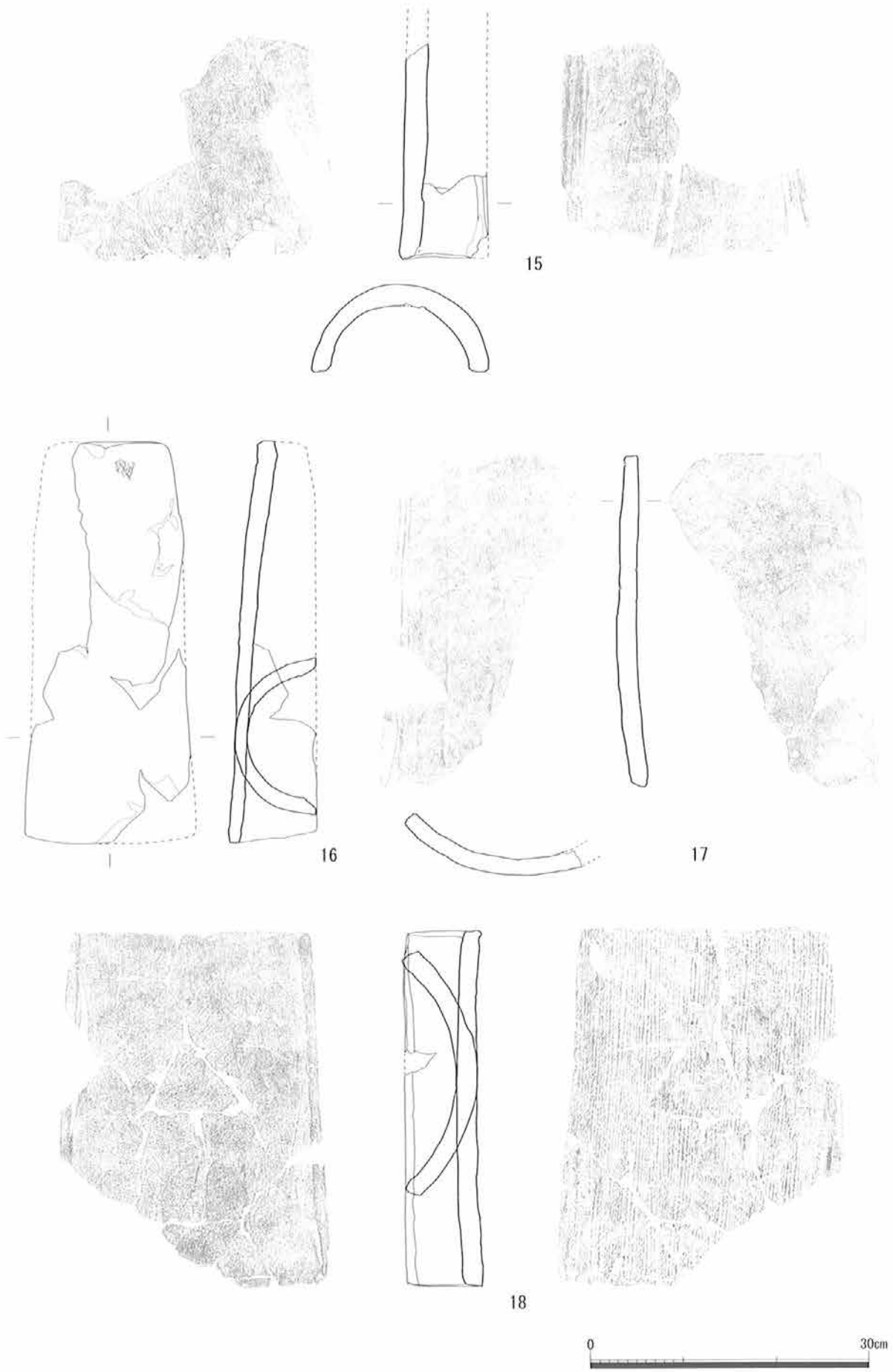


图 12 VIII 层出土遗物实测图 3 (1/6)

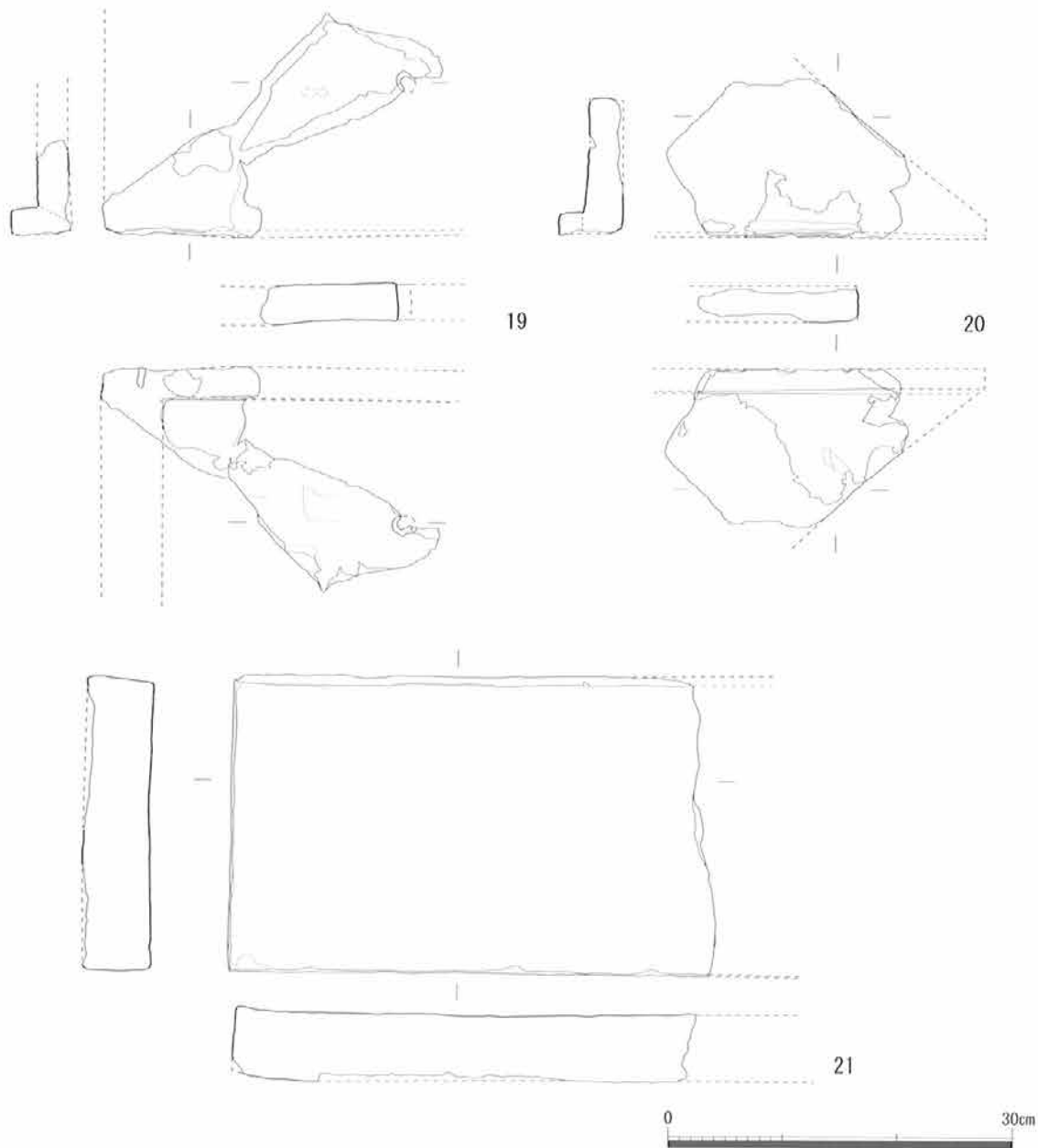


図13 VIII層出土遺物実測図4 (1/6)

1.8 cmの強めのなでが施され、凸面にも幅0.3 cmの工具痕が残り、弧線中段の幅が広い。色調はN8/0 灰白色で、1 mm以下の砂粒を含む。10は全長43.3 cm、瓦当幅34.0 cm、狭端幅30.0 cm、瓦当の厚さ4.0 cmで弧線の幅は均等である。凹面には幅7.0 cmの摸骨痕、糸切り痕、布目痕があり、側縁側には指頭圧痕が残される。凸面は、磨滅により調整は確認できない。11は、全長40.7 cm、瓦当幅32.2 cm (復元)、狭端幅28.5 cm (復元)、瓦当厚3.8 cm、弧線の幅は均等である。凹面には、幅8.0 cmの摸骨痕、糸切り痕、布目痕があり、狭端側を除き全面になでを施した指頭圧痕が多く認められる。凸面は縦から斜め方向のなでが施される。色調はN5/0 灰色で、焼成は硬質である。12は瓦当厚4.0 cm、13は瓦当厚3.9 cmの弧線幅が均等な三重弧文軒平瓦である。12は、製作中に瓦当凸面側に力が加わったのか、弧線が湾曲している。両個体とも、焼成は硬質である。14は、均整唐草文軒平瓦である。瓦当厚は5.7 cm (復元)、頸の形態は曲線頸で内外区を分ける圏線の凸線があり、外区は無文。内区上端には珠点が並ぶ。凸面は縦方向のなで、凹面は斜め方向のなで、瓦当面に沿ってなでが施される。色調は2.5Y6/1 黄灰色で焼成は良好である。

**丸瓦・平瓦** 出土した丸瓦は行基、平瓦は桶巻作りの破片が大部分をしめているが、接合するものは少ない。



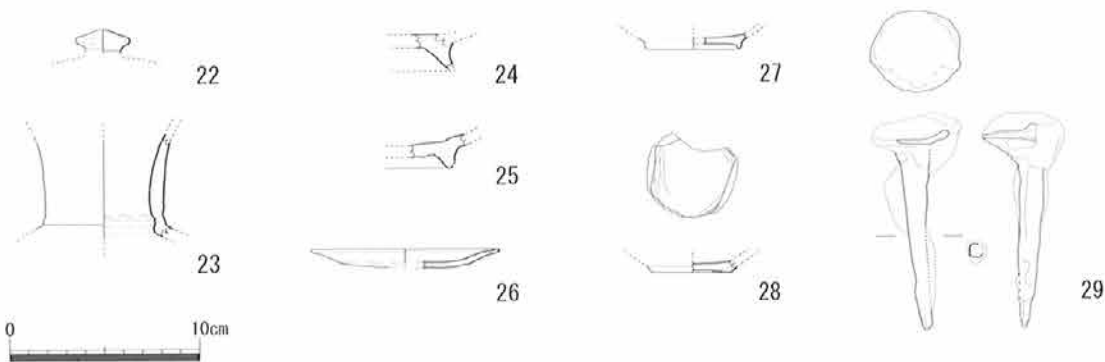


図14 VIII層出土遺物実測図5 (1/4)

15、16は行基丸瓦である。15は広端幅19.6cm(復元)、広端部高9.5cm、厚さ2.2cm。凸面は斜め方向のなでが施され、広端側には横なで、指頭圧痕が残る。凹面には、布目痕と布袋の綴じ合せ痕があり、押圧痕跡が認められる。色調はN7/0灰白色で焼成は良好である。16は全長43.1cm、狭端幅13.5cm、広端幅18.4cm(復元)で、行基丸瓦では全体の大きさがわかる唯一の例である。凸面の磨滅が激しく、横方向のなで調整が行われているようである。また、狭端側には、縄タタキ状の圧痕が認められる。凹面には、糸切り痕、布目痕がある。表面の色調は2.5Y4/1黄灰色で断面は5Y8/1灰白色を呈し、焼成は軟質である。17、18は桶巻作りの平瓦である。17の全長は35.6cm、厚さは1.5～2.0cmあり、狭端幅は24.2cm、広端幅は28.6cmに復元できる。凸面は横なで後斜め方向のなでを施し、凹面は幅約5cmの摸骨痕、布目痕、3.5cm程の楕円形の押圧痕が認められる。色調はN6/0灰色で、3mm以下の白色砂粒を含む緻密な胎土であり、焼成も硬質である。18は全長38.0cm、狭端幅は24.5cmあり、広端幅28.2cmに復元できる。凸面は、全面縄タタキが施されており、凹面には糸切り痕、布目痕が残る。色調はN7/0灰白色、焼成は良好である。

**隅木蓋瓦** 基壇外周の北東角付近で出土を確認していたが、他にも遺物の洗浄中に隅木蓋瓦とみられる破片を10点程確認した。いずれの破片も5mm以下の砂粒を含み、表面の色調は2.5Y5/1黄灰色で他の瓦類とは、色調や胎土が異なる。表面は、けずりで仕上げられている。19、20の2点とも蓋形の隅木蓋瓦で、上面は平坦、先端と両側に幅、高さ2.0cmの凸帯を設け、掛りとしている。側面に装飾はない。19の破片には釘穴があり、そこを中心とすると幅25.6cm、内法は約21.8cmとなる。20には茅負にあたる斜めに裁断される部分が残存している。奈良時代後半のものであろう。

**埴** 21は幅25.5cm、残存長42.6cm、厚さ5.9cmの長方形の埴である。色調は10YR8/1灰白色で、表面はなでが施されたようであるが、ほとんどが磨滅している。線刻、装飾は認められない。

**土器** 22は須恵器杯蓋の宝珠つまみ、23は灰釉陶器壺頸部である。24、25は黒色土器椀底部である。2点とも内黒であり、磨滅が激しくミガキが確認できない。畿内系II、III類の底部と考えられ、9～10世紀代のものであろう。26は土師器皿で口径約10.0cm、器高1.0cmに復元される。胎土は2.5Y8/2灰白色で器壁が3mmと薄く、口縁を外反させる。11世紀後葉。27、28は瓦器椀底部である。27の高台は断面三角形を呈しており、川越編年III Aにあたる12世紀後葉から13世紀中葉のものである。28は内面見込みに施される暗文が残り、貼り付け高台は扁平なものとなっている。27よりも下り、川越編年III C～III E、13世紀後葉から14世紀前葉の時期にあたる。

**鉄釘** 全長11.3cm。釘頭は錆で膨張しており、形状は不明。釘身は一辺1.1cmの方形である。

## (2) VII層

**軒先瓦** 30、31は右巻の巴文軒丸瓦で巴文の外側に圈線をもち、瓦当面には離れ砂が付着している。色調はN5/0灰色で焼成は硬質である。鎌倉～室町時代。32は中心飾りのない均整唐草文軒平瓦で曲線頸を持つ平

安時代の瓦である。

**土器** 33、34は土師器皿である。33は口径6.8cm(復元)、器高1.3cmである。胎土は精製されているが、1mm程度の長石を含む。色調は10YR7/4にぶい黄橙色である。12世紀末から13世紀代のもの。34は口径8.8cm(復元)、器高1.8cmで、口縁部下部に段をもち、口縁を外反させる。胎土は精製されており、色調は7.5YR7/6橙色である。器面は磨滅しているが、14世紀前葉のものである。35は須恵器で壺の底部と思われる。器面全体が水流による磨滅を受けている。

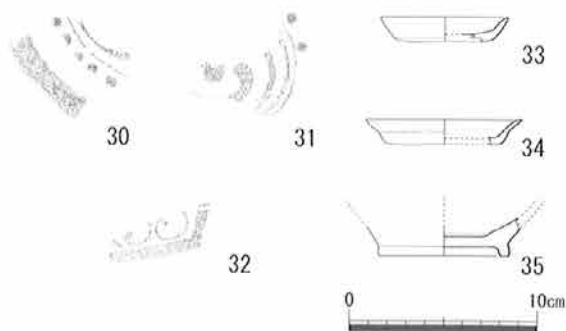


図15 VII層出土遺物実測図(1/4)

### (3) VI層

この層には火災によって塵芥となった炭、瓦、土器、焼けた壁土などが含まれるので、1mの区画を設けてすべてを取り上げ、篩にかけ、洗浄作業を経て、遺物の選別を行った。その結果、焼土となった壁土がコンテナ32箱になり、壁表面に施される白土が剥離したものの1箱、瓦8箱、その他土器類、鉄釘、用途不明の銅製品、礎石から剥離した花崗岩片、凝灰岩などを検出した。瓦、土器類は、小片となったものが多く、火を受けて発泡した瓦も含まれる。区画を分けて取り上げたが、遺物の出土状況には、特徴的な傾向は認められない。

**軒先瓦** 36は巴文軒丸瓦で珠文帯の外内に圈線をもつ。37は三重弧文軒平瓦、38、39は平安時代の曲線頸の均整唐草文軒平瓦。40は室町時代の貼り付けの段頸の均整唐草文軒平瓦である。被熱のために橙色に変色している。

**土器** 41は口径6.7cm(復元)、器高1.6cm(復元)の土師器皿である。丸みを帯びた器形で体部上端に段をもつ。口縁端部は内側に肥厚してい

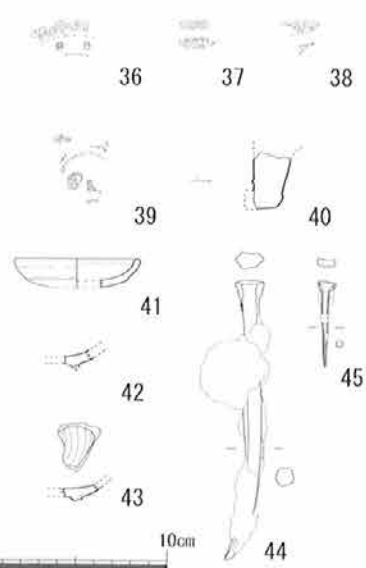


図16 VI層出土遺物実測図(1/4)

る。胎土は精製されており、色調は10YR7/4にぶい黄橙色の橙色系の土師皿で13世紀末頃。42、43は瓦器碗底部である。高台の形状により、42は12世紀後葉～13世紀終末、43は見込みの暗文、扁平な貼り付け高台から13世紀後葉から14世紀前葉のものと思われる。

**鉄釘** 44は、長さ15.1cm、釘身は一辺0.9cmの方形である。45は巻頭で、長さ5.0cm、釘身は一辺0.3cmの方形の釘である。全体の形状がわかるものはこの1点だが、同種の破片が12点出土している。

### (4) III～V層

**軒丸瓦** 46は素弁8弁蓮華文軒丸瓦でIV層からの出土である。瓦当直径は16.4cm(復元)、厚さは1.7cm、中房の直径は3.4cm、中房の周囲には凹線が巡る。弁端に珠文、中房から外側にはみ出すように珠文があり、片岡王寺跡での出土が知られるものである。珠文は各弁の境に対応し1+(8)であろう。色調はN5/0灰色で5mm以下の白色粒が混ざり、焼成は硬質である。裏面は、不整方向のなでによって仕上げられている。47は忍冬蓮華文軒丸瓦でIV層からの出土である。瓦当径18.0cm(復元)、厚さ2.3cm、中房の直径は4.5cm。内区には中央に鏝、弁端に珠文のある蓮弁と5葉の忍冬文を交互に配置する。蓮弁と忍冬文の間にも珠文が配置される。中房には1+8の珠文があり、中央の珠文の周囲には段がつけられており、外側の珠文の位置は、蓮弁

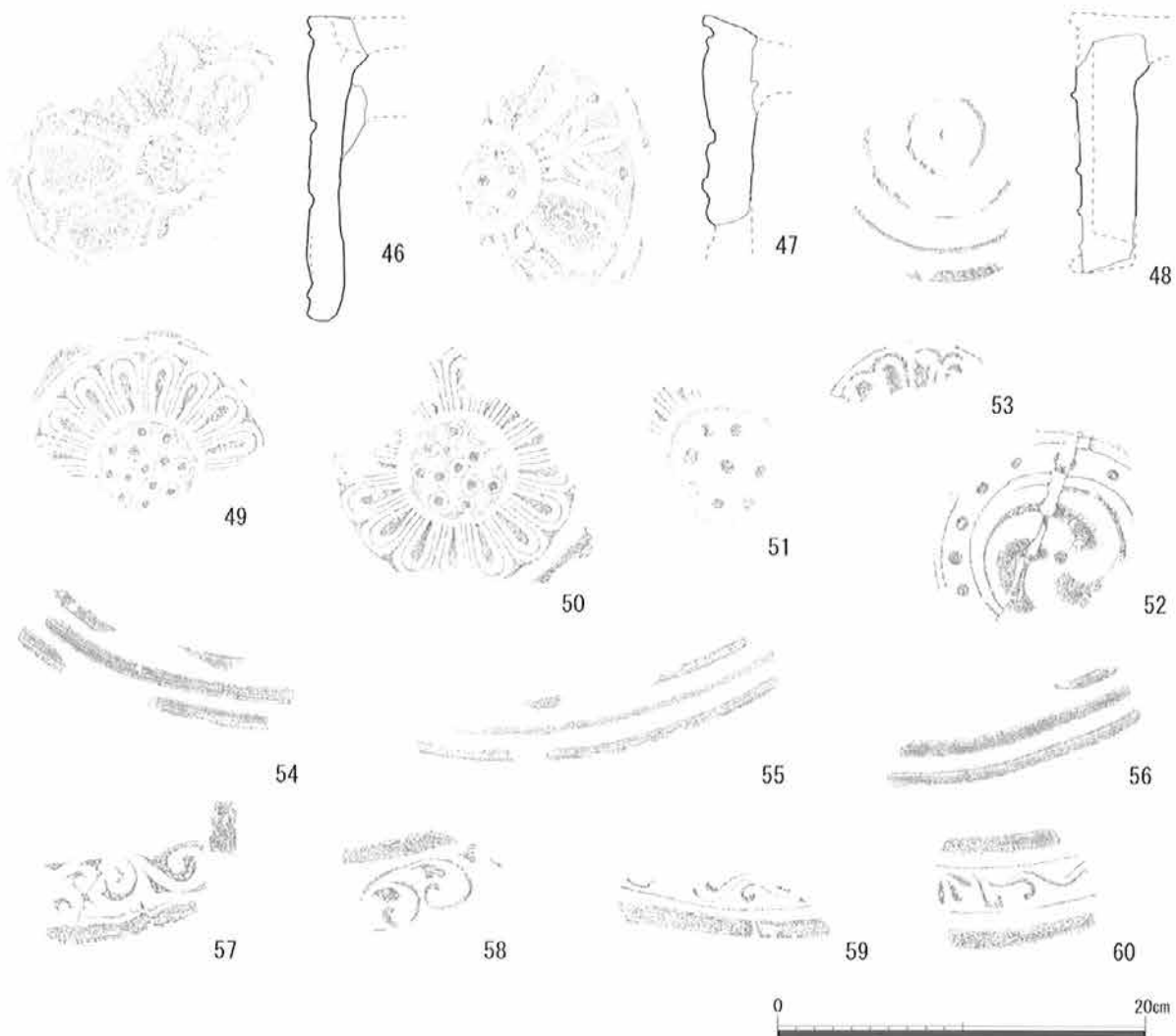


図 17 III・IV・V層出土遺物実測図 (1/4)

の中心と忍冬文の根元に対応している。中房の周りには回線が巡っている。丸瓦先端の加工、丸瓦狭端の形状は不明である。この瓦は西安寺跡出土の特徴的な瓦として報告されており、同文の瓦が帝塚山大学附属博物館に所蔵される西上家田蔵資料にある。帝塚山大学に所蔵される資料は、神奈川県横須賀市の宗元寺跡出土例との同范関係が確認されているものである。帝塚山大学教授清水昭博氏のご協力で、47を帝塚山大学に所蔵される資料との比較を行ったが、同范関係は確認できず、この忍冬蓮華文軒丸瓦の范型が複数存在することが明らかとなった。48はIII層からの出土。重圏文軒丸瓦で平城宮式6012Bである。瓦当直径は14.0 cm、厚さ3.2 cm、色調は2.5Y8/2 灰白色で、焼成は良好である。瓦当は、瓦范に押し付けた粘土の厚さが8 mm程度と薄く、その背面に2.4 cm程の厚さの粘土を付加して成形しており、瓦当裏面、側面はケズリで調整される。

49、50は中房の珠文1+4+8、外縁が斜縁・無文の単弁16弁蓮華文軒丸瓦、51は中房の珠文が1+8の単弁16弁蓮華文軒丸瓦、52は左巻三頭巴文軒丸瓦で割れた范を使用している。54～56は三重弧文軒平瓦、57は唐草文が陰刻で表現される均整唐草文軒平瓦、58は中心飾りのない均整唐草文軒平瓦で、この2点は平安時代のものである。59、60は室町時代の均整唐草文軒平瓦で、60には下向きの半截菊花文の中心飾りがある。49～52、54～59はIV層、60はV層から出土したもので、これまでに出土が確認されている軒先瓦である。53はIV層から出土した複弁蓮華文軒丸瓦で、新たに確認されたものである。

### 第3章 まとめ

2015年の第3次発掘調査、今回の第7次発掘調査により、明らかとなった塔についてまとめる。

**塔の規模** 検出した東面側柱の礎石3基の柱座を推定し、それぞれの中心距離を計測すると、柱間2.25m、三間等間の一边6.75mの塔が復元できる。この値で第3次調査で検出した心柱、四天柱の礎石抜取穴の位置にも照らし合わせると齶飾の無い位置に納まる。基壇の出は、礎石の柱座の中心点から基壇外装までの距離から約3.3mである。塔の造管尺を1尺30.0cmと考えると、柱間7.5尺、初層建物一边22.5尺、基壇の出11尺、基壇一边44.5尺と納まりの良い数値が得られる。基壇外周で明確な雨落溝の施設はなかったが、基壇外周の傾斜、瓦の出土状況、足場穴とみられる遺構の位置から、軒の出は、側柱の芯から約3.95m(13.5尺)の地点に推定できる。これらの数値を他塔と比較すると平均的といえるが、軒の出がやや深い。復元される基壇の高さは、約1.2m(4尺)である。

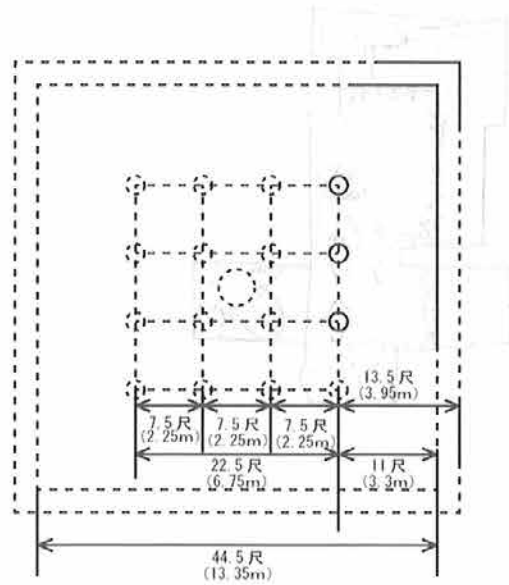


図18 塔基壇復元模式図

**基壇** 基壇外装の乱石積は、すでに上部の1～2段は失われ、石積も外側へ膨らんでいる状態であったが、基底の石列に使用される石は、大きさも整い、その並びに歪みも認められないので、創建時の石積と考えられる。石積の間に創建瓦と思われる軒丸瓦がはさまれていること、裏込めの上に凝灰岩の破片が混入していることから、石積に手直しを加えられたと考えられる。検出した石積の上部に凝灰岩が設置されている箇所があり、基壇外周や上層盛土からも凝灰岩が多数出土することから、凝灰岩を葛石として使用した可能性も考えられる。

心礎は、基壇上に露出していたという石田氏の開取りの報告があるように地上式と考えられる。第3次調査では心礎の抜取穴を検出している。

基壇の築成にあたっては、掘込地業は行われていない。塔基壇の下の地山面が高く、基壇外周に傾斜がつけられ、低くなっていることから、地山を土壌状に削り出し、その上に基壇を構築したと考えられる。基壇の残りが良いことから保存を優先し、断ち割りなど基壇内部の調査については、行わなかった。

表2 他塔との規模比較

寺院名	脇間	中央間	脇間	初重塔身 (一边) S	基壇 (一边)	基壇の出 K	軒の出 E	柱間比	2K/S	2E/S	年代
西安寺跡	7.5	7.5	7.5	22.5	44.5	11	13.5	1:1:1	0.88	1.2	7C末～8C初頭
尼寺北庭寺	8	8	8	24	(46)	(11)	—	1:1:1	—	—	670年頃
法隆寺	6.2	8.8	6.2	21.2	45.6	12.2	13	1:1.41:1	1.15	1.23	7世紀末
法起寺	6.2	8.8	6.2	21.2	38.5	8.6	11.4	1:1.41:1	0.81	1.08	706年
法輪寺	(6.1)	(8.8)	(6.1)	(21)	(44)	(11.5)	—	1:1.45:1	1.09	—	(670～690)
山田寺跡	7	8	7	22	43	10.5	—	1:1.14:1	0.95	—	676年
川原寺跡	6.6	6.6	6.6	19.8	38.6	9.4	11.5	1:1:1	0.95	1.16	7世紀後半
橋寺	7.8	7.4	7.8	23	45	11	—	1:0.95:1	(1.07)	—	680年前後
本薬師寺跡東塔	8	8	8	24	47.3	11.6	15	1:1:1	0.972	1.25	7世紀後半
当麻寺東塔	5.29	6.98	5.29	17.56	40.544	11.492	11.44	1:1.33:1	1.3	1.30	奈良時代末
当麻寺西塔	5.31	6.63	5.31	17.25	35.91	9.334	10.8	1:1.25:1	1.08	1.25	平安時代初期

(令小尺: 1尺 = 0.294 ~ 0.303を使用)

参考文献

太田博太郎責任編集 1984 『塔婆Ⅰ』 日本建築史基礎資料集成11 中央公論美術出版

奈良文化財研究所・国立扶余文化財研究所 2017 『韓|中|日古代寺院址比較研究(1)～本塔址編～(日本語版)』 国立扶余文化財研究所学術研究第49輯

**塔の創建** 基壇外周Ⅷ層の瓦の出土状況は、東側で希薄、北側では集中しているものの塔に使用された瓦としては数量が少なく、接合するものも少ない。Ⅷ層から出土した軒丸瓦は12点で、その内訳は、素弁2種各1点、単弁4種10点で、この中では、単弁の中房蓮子1+4+8の単弁16弁蓮華文が5点と最も多く、石積にはさまれる軒丸瓦もこれである。このことから、塔の創建瓦を中房蓮子1+4+8の単弁16弁蓮華文としたい。また、Ⅷ層出土の軒平瓦は、三重弧文軒平瓦16点、均整唐草文軒平瓦1

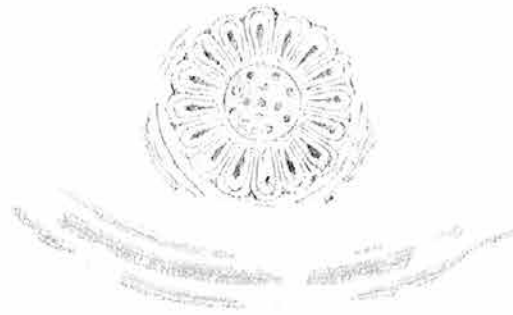


図19 塔の創建瓦

点の計17点であった。三重弧文軒平瓦は、弧線の幅の特徴から、弧線幅が均等であるものを4点、中段の弧線が太いものを4点確認した(残る8点は小片で未分類)。胎土と焼成から、創建瓦とした軒丸瓦に組み合う軒平瓦は中段の弧線が太いものと考えられる。その他の単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦は補修用瓦として使用されたものだろう。1点のみの出土であった均整唐草文軒平瓦(14)は、Ⅷ層からの出土軒丸瓦に組み合う時期のものがなく、Ⅷ層の堆積時期が出土した土器の年代から13世紀まで下がるものであり、周りの建物所用の瓦の混入も考えられるため、塔の所用瓦から除外しておく。創建瓦とした単弁16弁蓮華文軒丸瓦は、蓮弁が単弁ではあるが中房の珠文、斜線の外縁形状に川原寺式軒丸瓦の特徴がみられることから、7世紀後半から8世紀初頭の年代と考えられる。塔が地上式の心礎をもつことから、塔の創建は、7世紀末から8世紀初頭とする。

**塔の廃絶** 塔基壇が炭層(Ⅵ層)に覆われ、礎石は焼けて表面が剥離し、基壇検出面が赤く焼けている状況から、塔は火災で焼けたと判断しがちである。しかし、検出した基壇は、乱石積の上部が抜き取られ、裏込めが確認できる程に削平を受けていた。その削平部分でも火を受け、焼土化する部分があるので、基壇の削平後に火を受けている。そして、基壇外周の雨落にあたる堆積層(Ⅷ層)から焼けた瓦、炭、焼けた壁土等が出土しない。また、第3次調査、第7次調査を通して瓦、焼けた壁土は出土するものの、埴皿や仏具といったものは全く確認できていない。このことから、塔が廃絶した後、塔跡では片付行為が行われ、使用できる石材、部材は持ち出されてしまったと考えられる。塔は焼亡したのではなく、老朽化、倒壊等の理由で廃絶したと考えられる。

Ⅷ層から出土する土器類は、9～10世紀代の黒色土器、13世紀後葉～14世紀前葉の瓦器碗である。創建期の土器がみられないのは、基壇外装の積み直しが行われた時に、基壇周辺の整備が行われたためと考える。基壇外周の埋没後、乱石積基壇の下部をⅧ層が覆う。Ⅷ層は水成堆積のみられる層で洪水等に見舞われたと考えられる。それは、出土遺物から14世紀になってからのことである。廃絶の明確な時期はおさえられないが、13世紀代には塔は廃絶していたと考えられる。

西安寺跡では、鎌倉、室町時代の瓦も数多く出土するが、塔にはこの時期の瓦が使用された形跡はなく、塔の再建は行われていない。場所を移して法灯を繫いでいたと考えられる。

**基壇上の火災** 基壇で火災があったころ、塔の基壇は、周囲から60～90cmほど露見した状態であった。火災の残留物は、前章で報告した通り、焼けた壁土が大勢を占めている。基壇上には建物の残骸が残っており、それらを片付けるため焼却したと考えられる。室町時代の軒平瓦も出土することから、焼却を行ったのは時代が下ってからのことである。その後、基壇外周は炭が流れ込みながら堆積が進んでいくが、近世～近代にかけて造成された厚さ約65cmの盛土がなされるまで、基壇上のⅥ層は地表に現れたままであったようである。盛土の造成は舟戸神社の創建によるものと考えており、Ⅵ層と盛土の間に堆積する層がないことから、神社の境内の整備が行われるまで、野焼きの場所として継続して使用されていた可能性も考えられる。

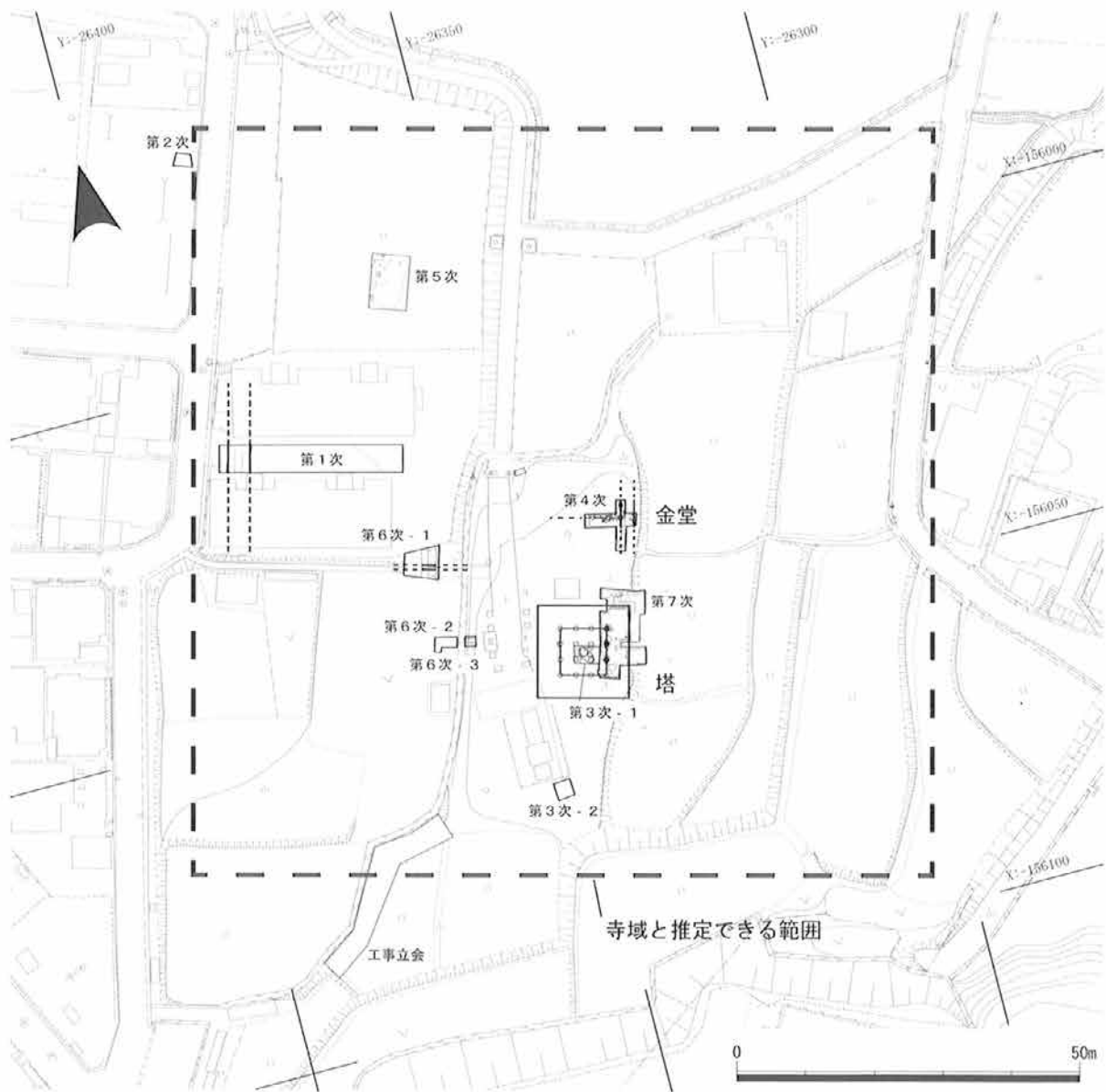


図20 西安寺跡の古代遺構 (1/1000)

**今後の調査** これまでの調査から、西安寺について次のことが明らかとなっている。

- ① 塔跡（第3次-1、第7次）、塔の北側に基壇・礎石建ち建物跡（第4次）を確認しており、石田氏が堂跡と想定した地点（第3次-2）に遺構はなく、塔の北側の建物が金堂にあたと推定できる。西安寺の伽藍配置は、四天王寺式、法起寺式が候補となる。
- ② 西安寺の立地を見ると、南には丘陵がせまっており、どちらの伽藍配置であっても、入口は西側と考えられる。参道と推定される地点では、東西方向に伸びる古代の溝（第6次-1）を検出している。
- ③ 塔の中軸線、寺域の西端で検出されている築地の溝かと思われる南北溝（第1次）、周囲の地形から方一町（108 m）の範囲が西安寺の寺域ではないかと推定できる。

西安寺跡の遺構が良好な状態で遺存していることは、これまでの調査で確認されたとおりである。王寺町では、今後も西安寺跡を保存・活用していくために、調査を継続することとなっている。まず、来年度は、第4次調査で確認している基壇・礎石建ち建物の調査を行い、その規模と方向を明らかにしたい。それによって、西安寺の伽藍配置がより明確なものとなってくる。その後、周辺地域の調査を行い、門、回廊、講堂の有無を確認し、寺域を確定させていきたい。





調査地遠景（東から）



遺構検出状況（北東から）



遺構検出状況（測量用合成写真）





調査前（東から）



調査前（北から）



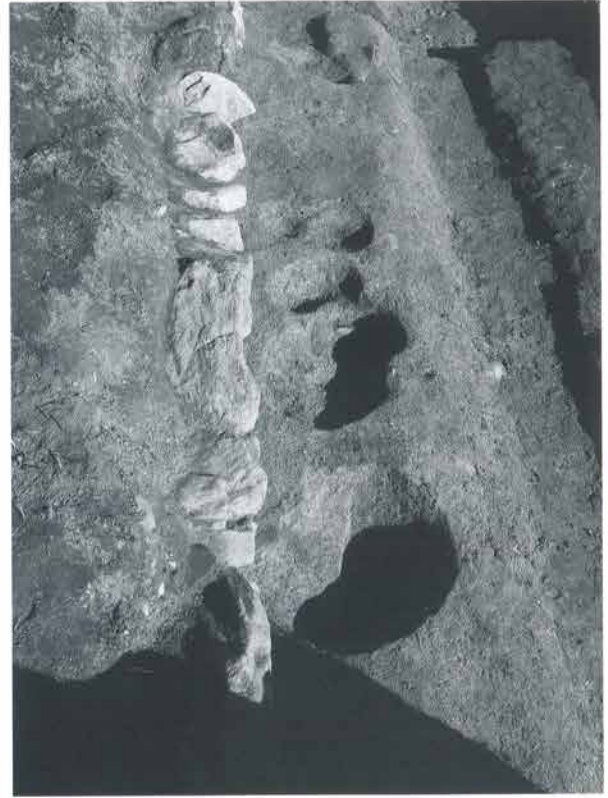
VI・VII層上面検出状況  
（北東から）



VI層上面検出状況  
(南から)



基壇東側VII層上面遺構検出状況 (南から)



基壇東側VII層上面遺構掘削状況 (南から)



基壇北側VII層上面遺構検出状況  
(北から)





基壇・基壇外周Ⅷ層検出状況（北東から）



基壇・基壇外周Ⅷ層検出状況（東から）



基壇外周Ⅷ層遺物出土状況（北から）



基壇・側柱礎石検出状況（北西から）



基壇・側柱礎石検出状況（南西から）





礎石 1 (西から)



礎石 2 (西から)



礎石 3 (西から)





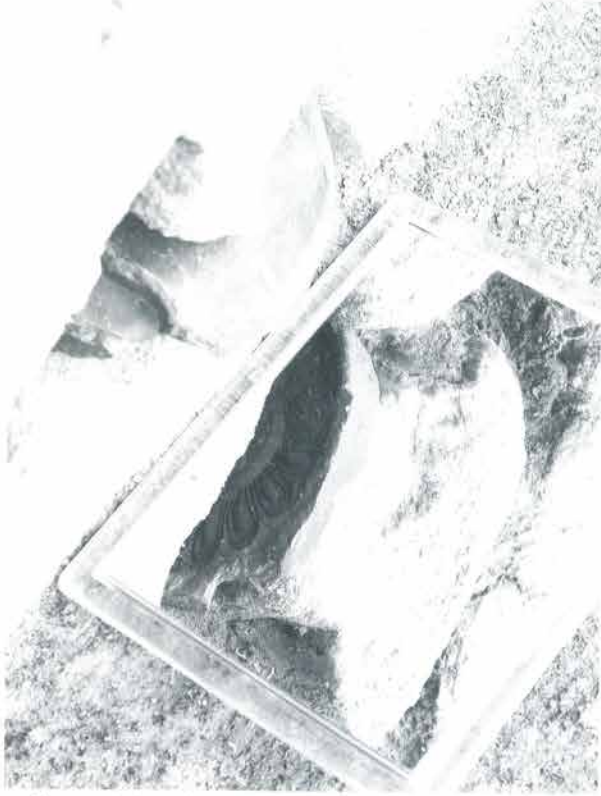
乱石積基壇検出状況  
(東から)



乱石積基壇検出状況  
(南東から)



乱石積基壇検出状況  
(北東から)



石積にはさまる単弁蓮華文軒丸瓦（鏡を設置）



基壇外装の裏込めに混じる凝灰岩の破片



基壇外周東面検出状況  
（北東から）



基壇外周北面検出状況  
（東から）





基壇外周東面検出状況  
(東から)



A - A' 基壇外周北壁  
土層断面 (南から)



B - B' 基壇外周西壁  
土層断面 (東から)



2



3



1



4



5



6



7



8



9



10



11



12



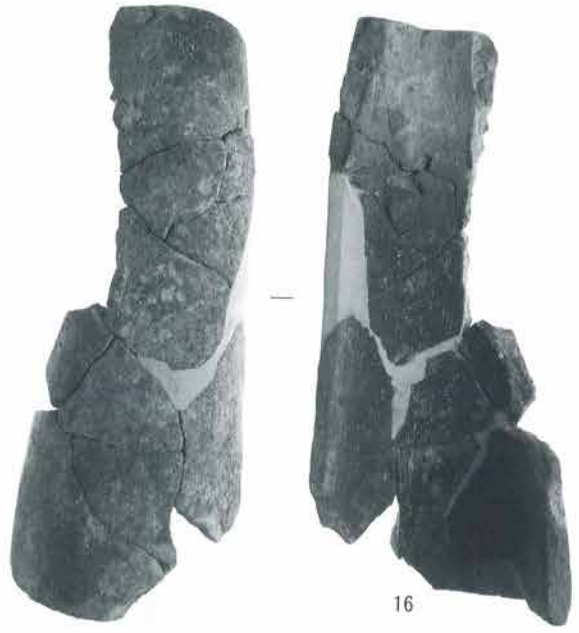
13



14



15



16

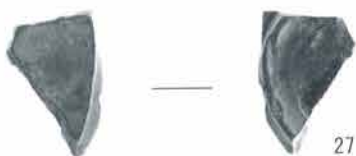
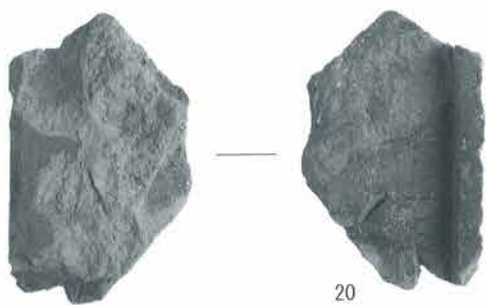


17

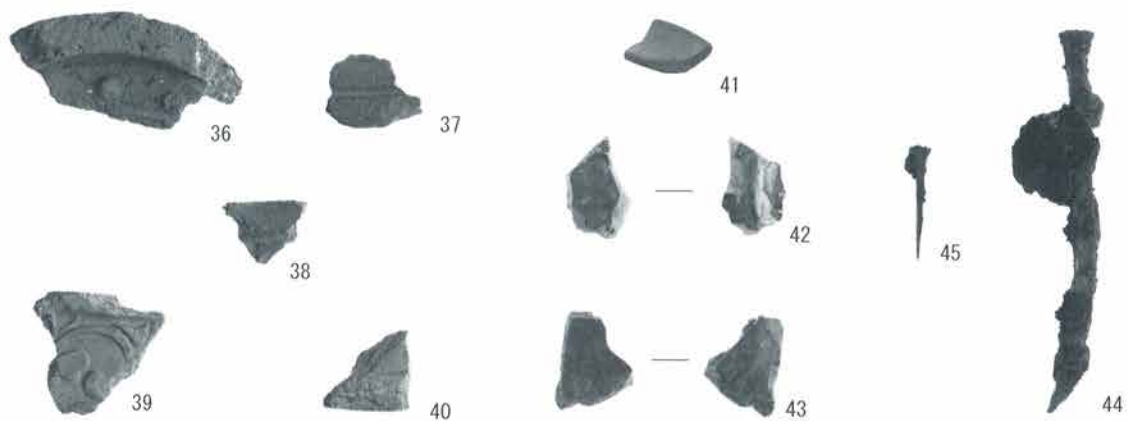
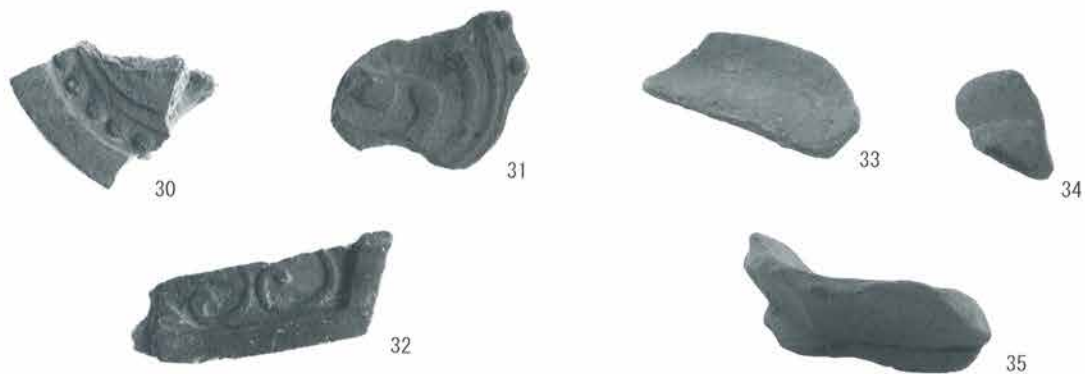


18











48



49



50



51



52



53



54



55



57



58



56



59



60

報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい7じはつくつちようさほうこくしよ							
書名	西安寺跡第7次発掘調査報告書							
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	櫻井恵							
編集機関	王寺町教育委員会							
所在地	〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号							
発行年月日	平成31（西暦2019）年3月25日							
収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
西安寺跡 (第7次)	奈良県北葛城郡 王寺町舟戸2丁目	29425	10B1	34° 35′ 36″	135° 42′ 45″	2017.11.16～12.26	70 m <sup>2</sup>	範囲確認
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西安寺跡 (第7次)	寺院	古代～中世	塔跡、乱石積基壇、礎石、礎石抜取穴		軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、埴、壁土、鉄釘、土師器、須恵器、瓦器、		塔跡の東半部分が良好な状態で残っていることが確認できた。塔の創建年代、規模が明らかとなった。	

西安寺跡第7次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書 第14集

2019年3月25日

編 集 王寺町教育委員会  
発 行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号

印 刷 株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地